Vol.13 ●とじこみスペシャル

COMICS & NOVELS!!

FANTASY LAND

ファンタジーランド



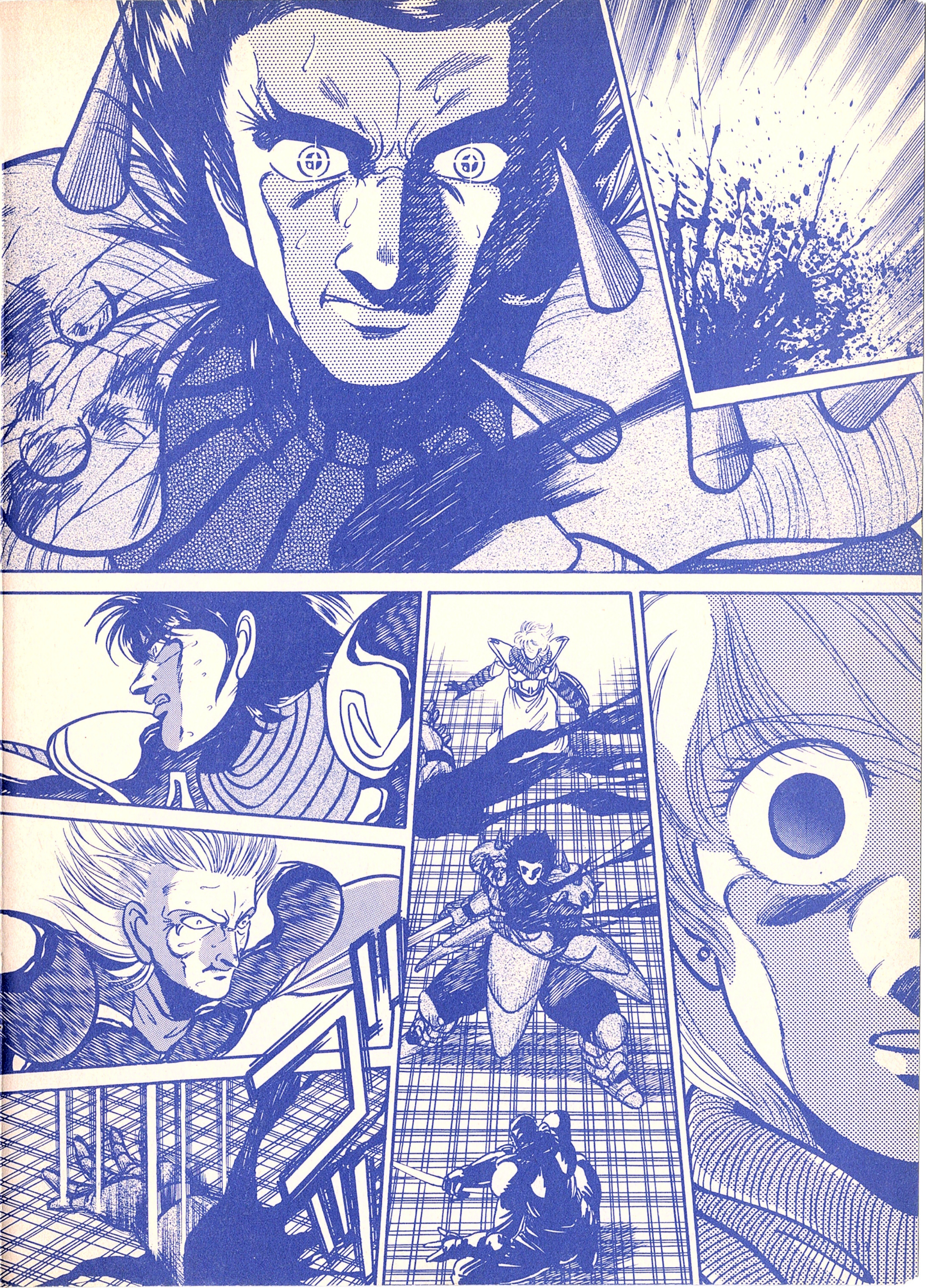
コミックと小説のコーナー、絶好調です!!

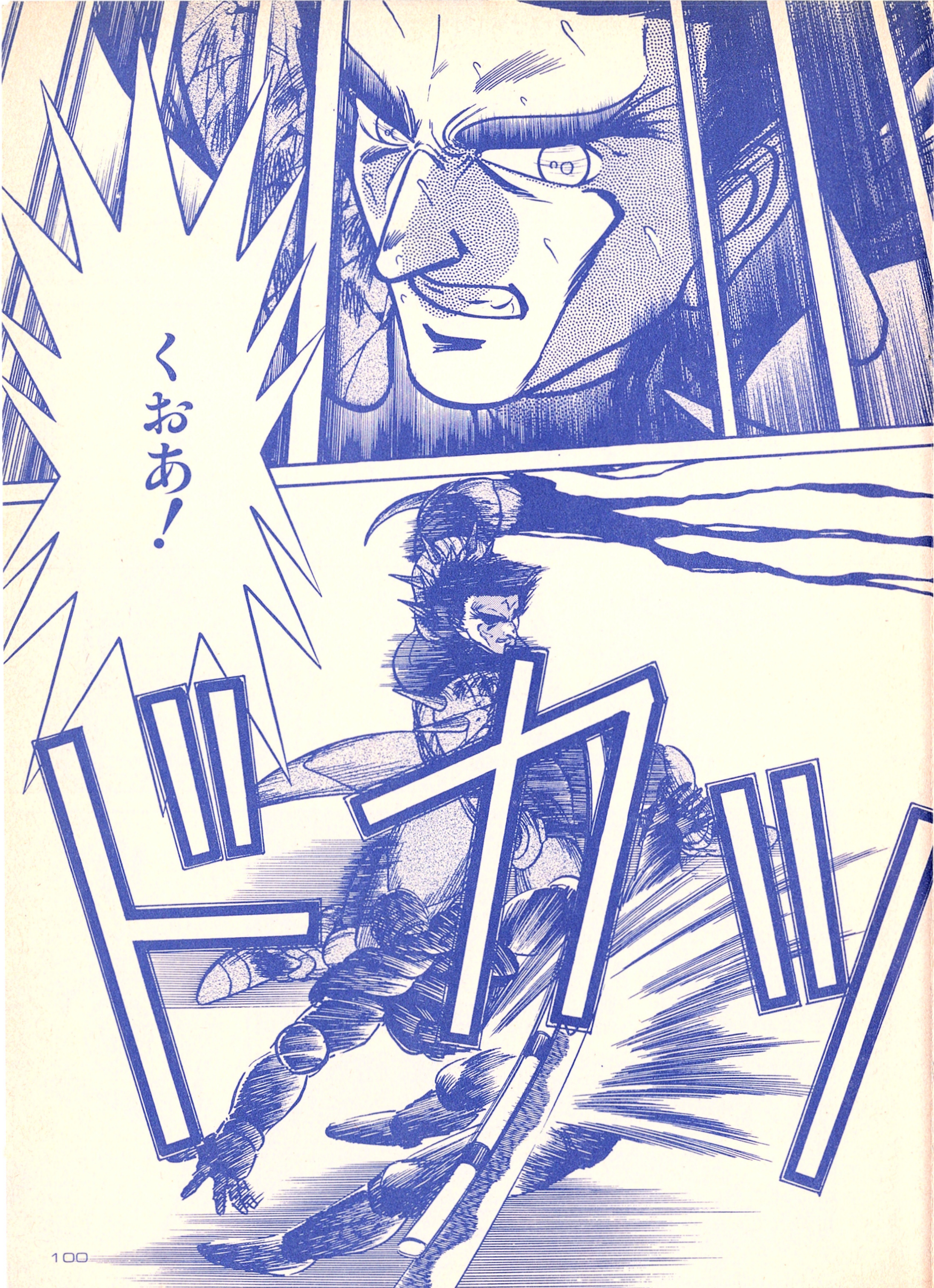
RPGやAVGのようにハラハラドキドキコンピュータ・ゲームよりも面白いコミックスや小説が読みたいっ!! そんな欲ばりなあなたのためのコーナーです!!

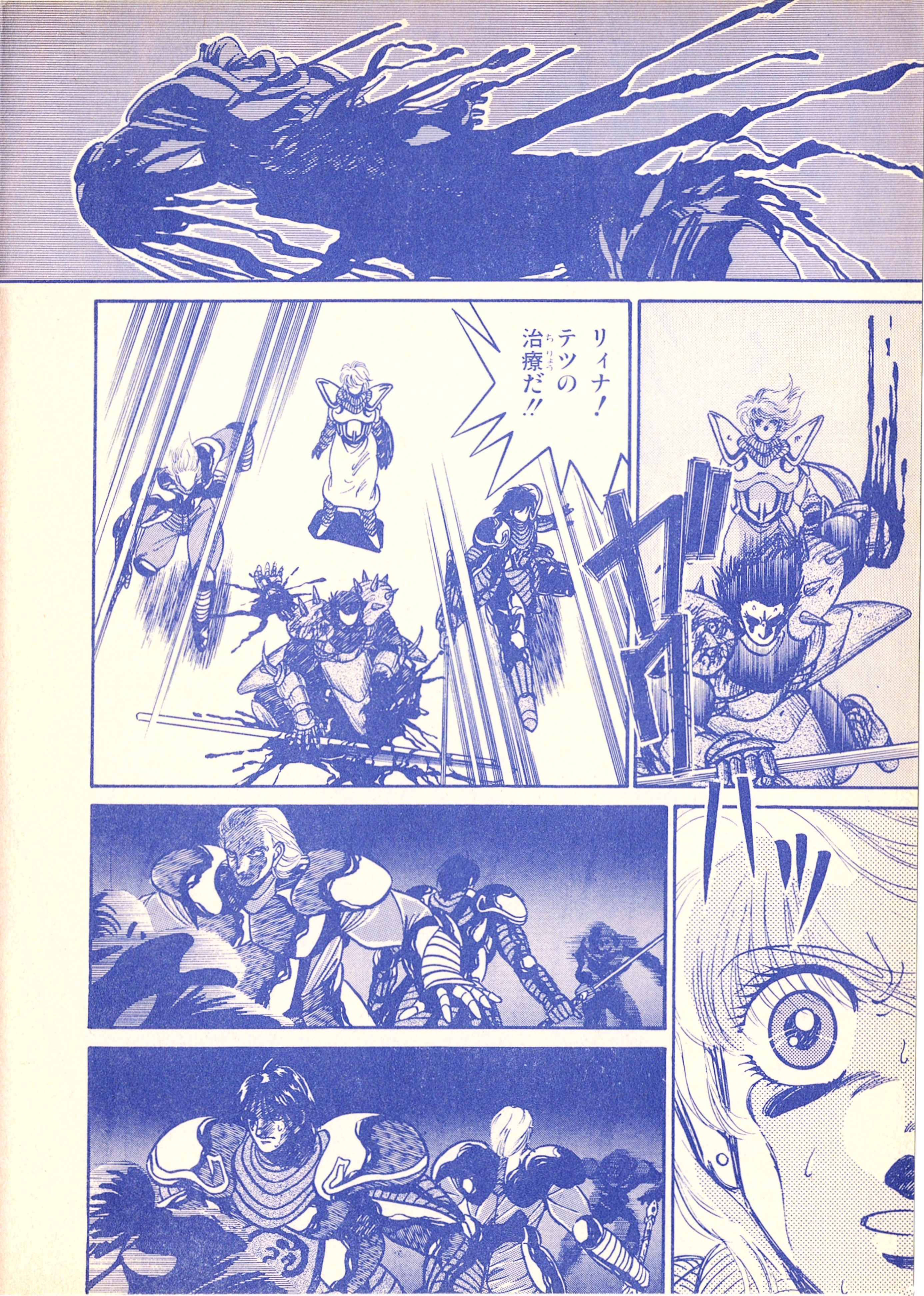
CONTENTS

FANTASY LAND

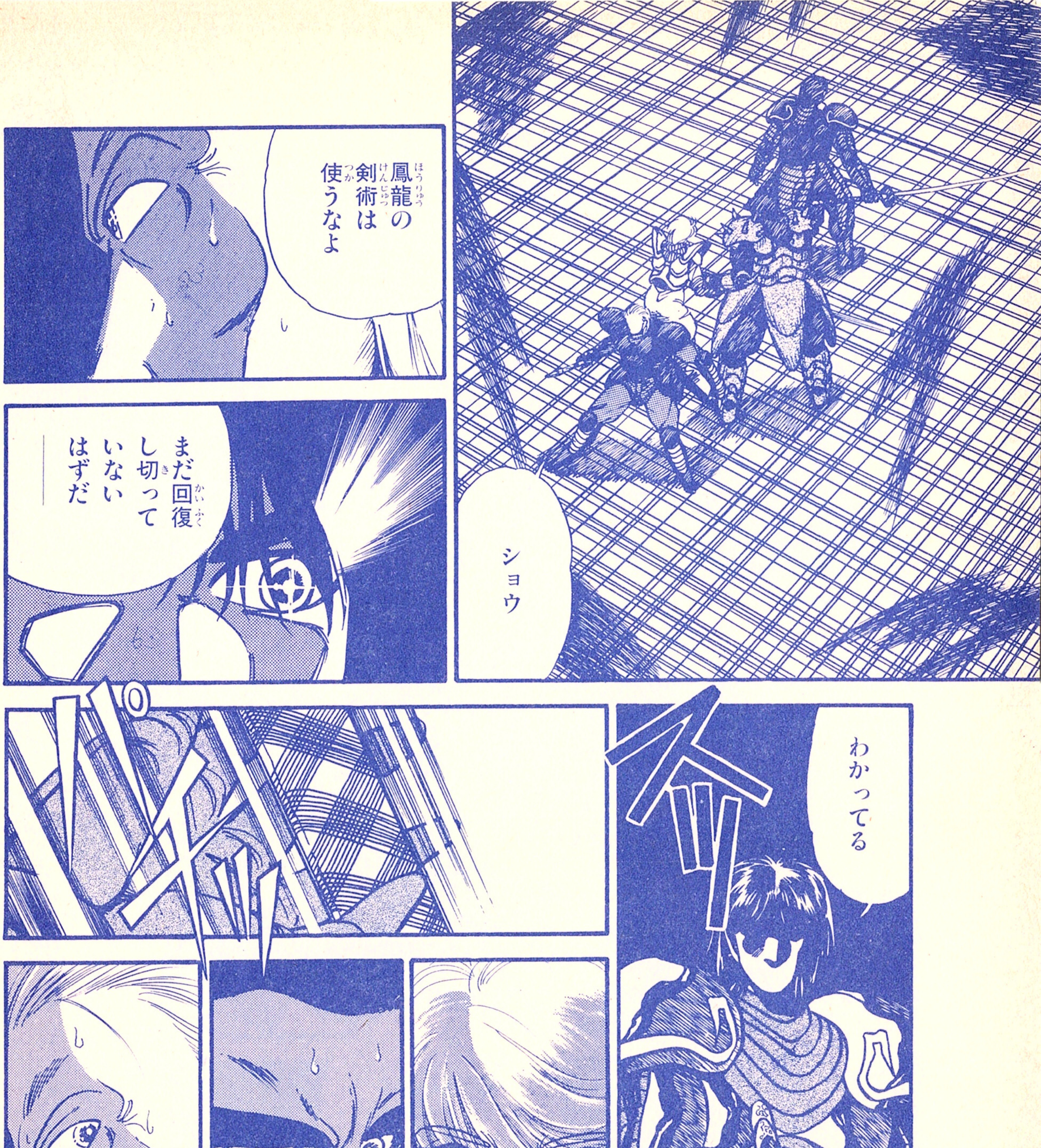

Wizardry®
ウィザードリィ外伝 第2部
鳳凰の塔
第9話「業火」 作/石垣環

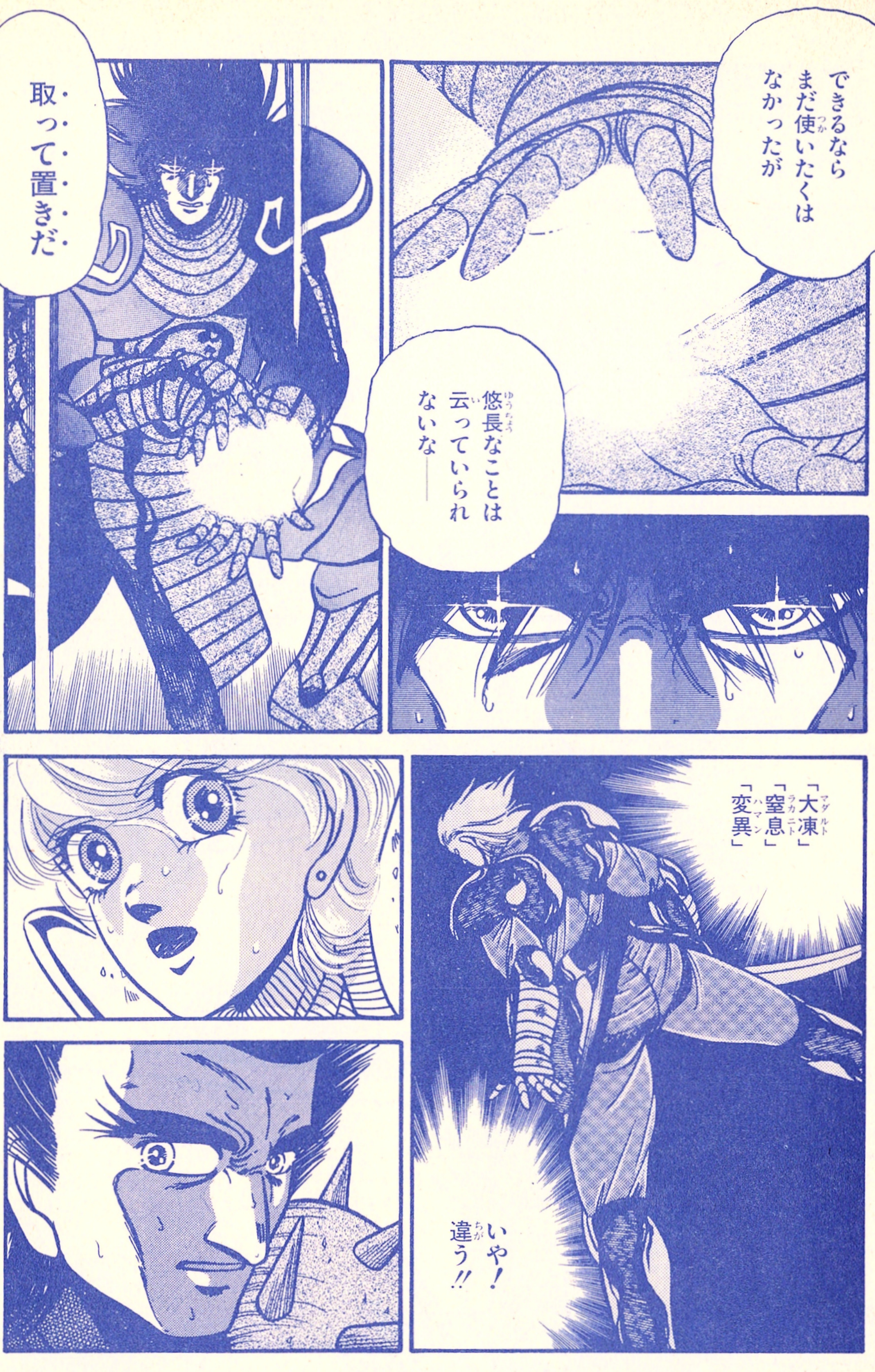


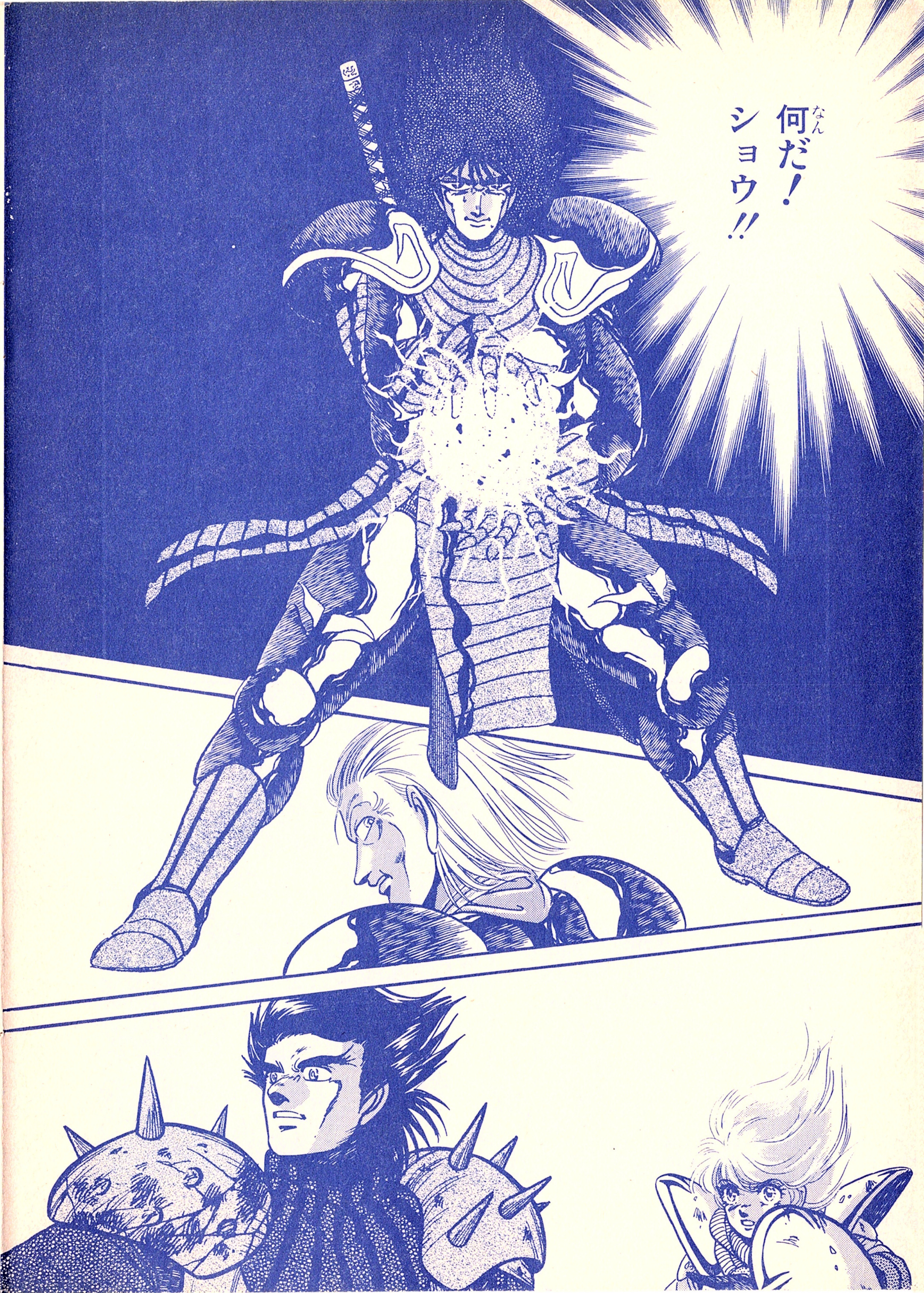

くおあ!
ドカッ

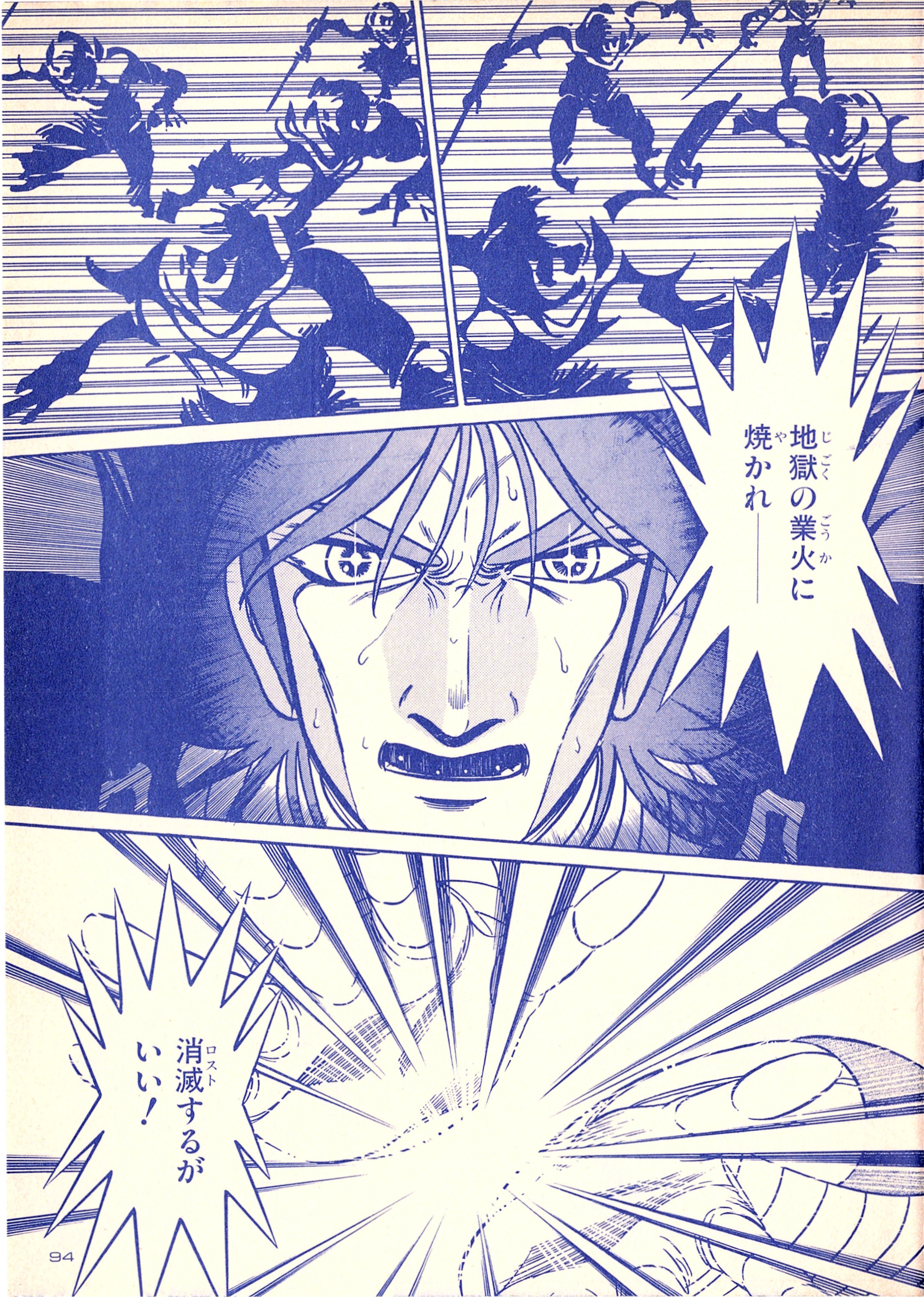

リィナ!
テツの治療だ!!


囲まれたな――
一撃で全滅できりゃ云うことなしなんだがな――
無理か――
忍者は素早さが身上だからな――
ごめんね ごめんね テツ
私が 私が――
良い…… 接合さえすれば―― 何とか――
気にするな リィナ
女を守るのが男の役目だからな
それに幼馴染の首が無くなった姿なんて
見たくはねえからな
テツ――

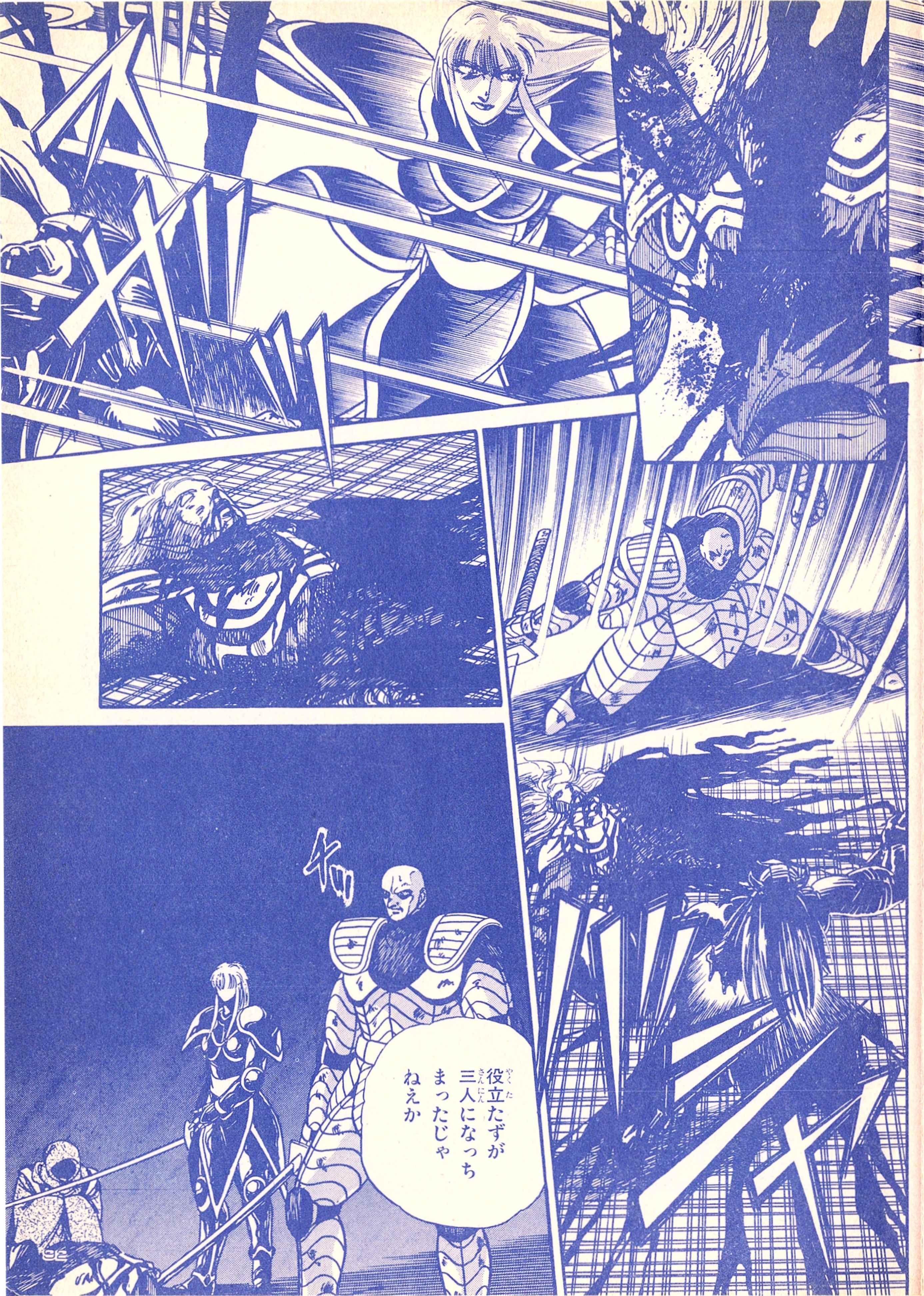

ショウ
鳳龍の剣術は使うなよ
まだ回復し切っていないはずだ
わかってる

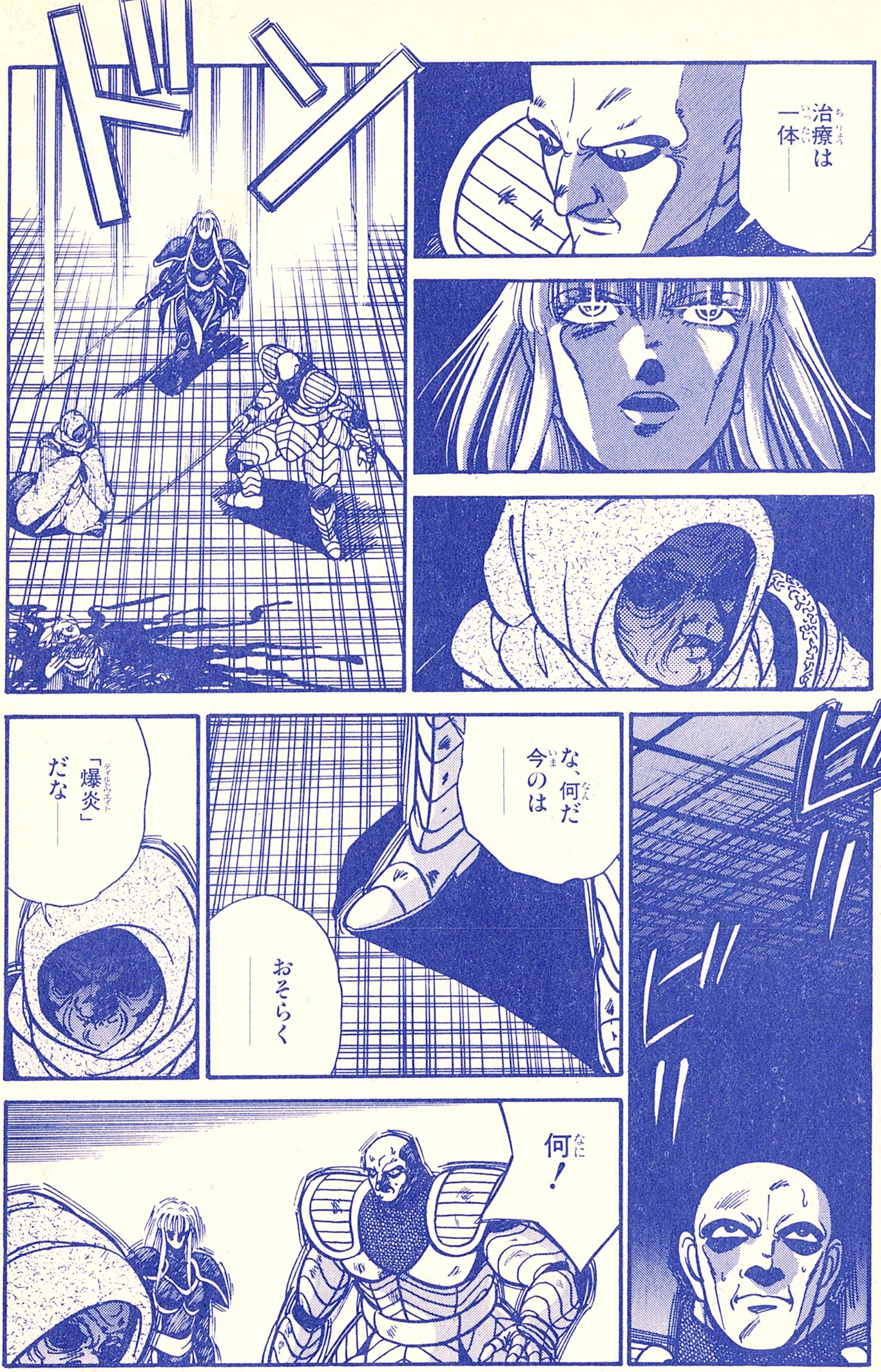

できるなら
まだ使いたくはなかったが
悠長なことは云っていられないな――
取っ・て・置・き・だ・・・
「大凍」「窒息」「変異」
いや！違う!!


何だ！ショウ!!

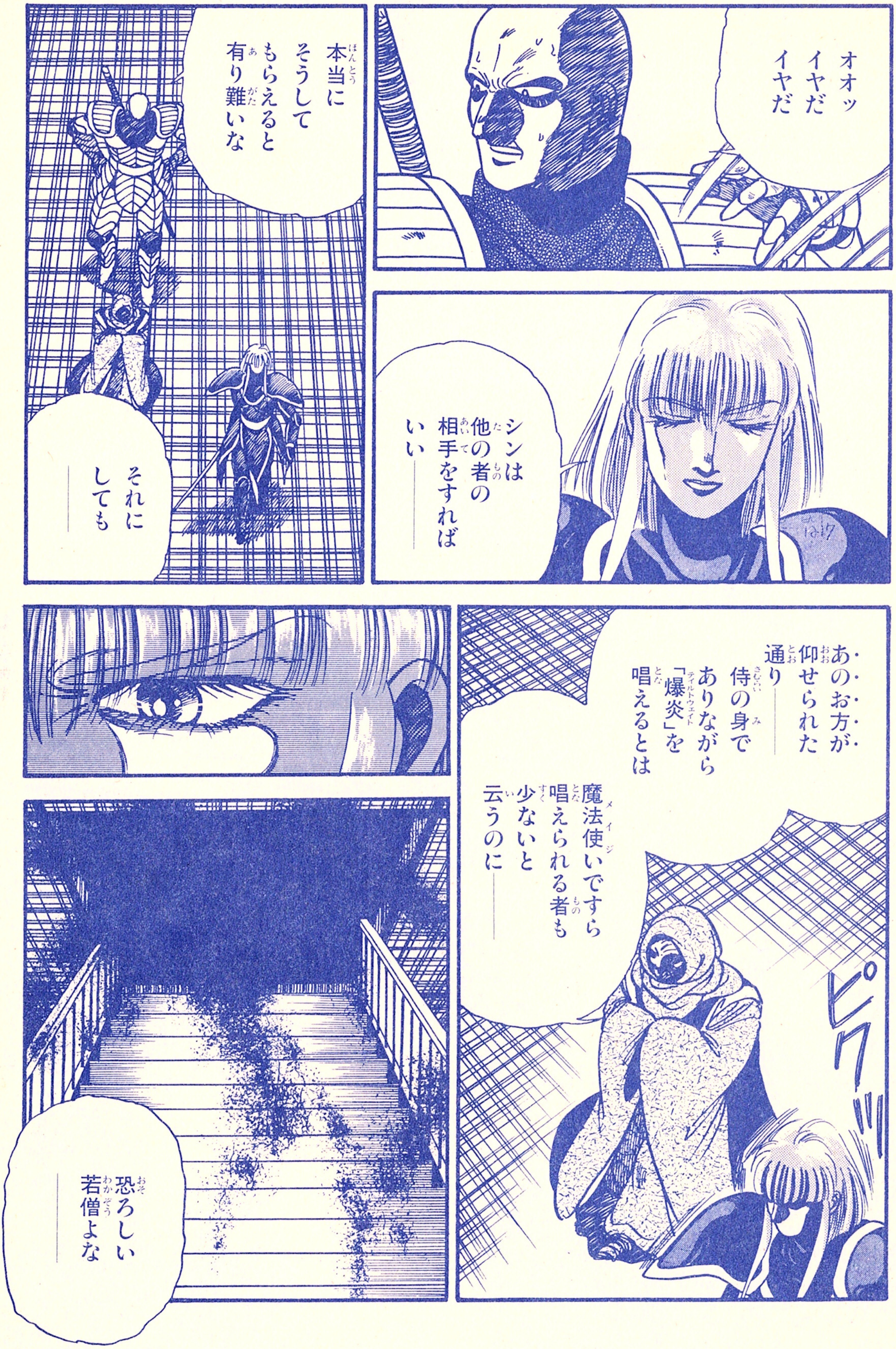

地獄の業火に焼かれ——
消滅するがいい!

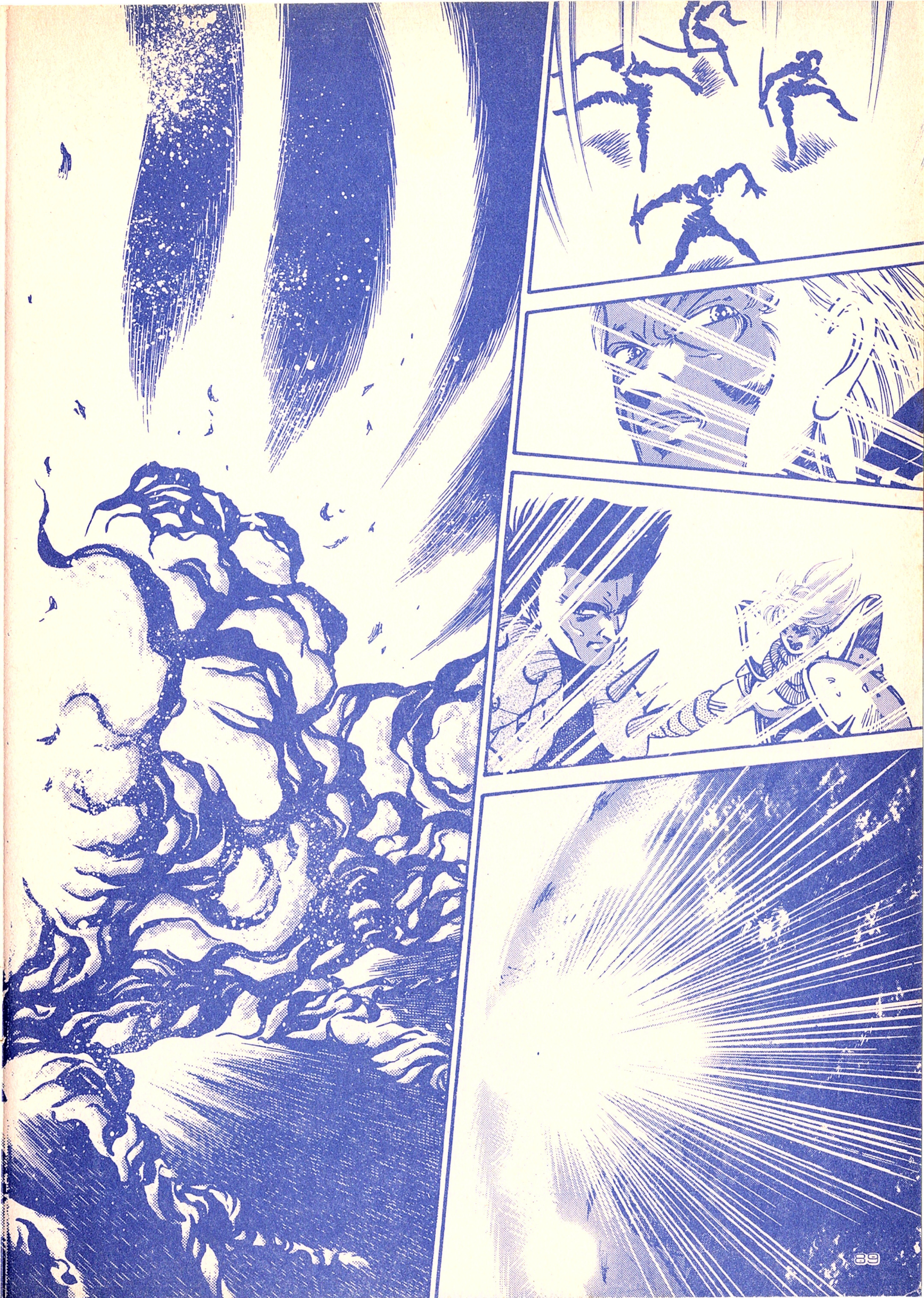


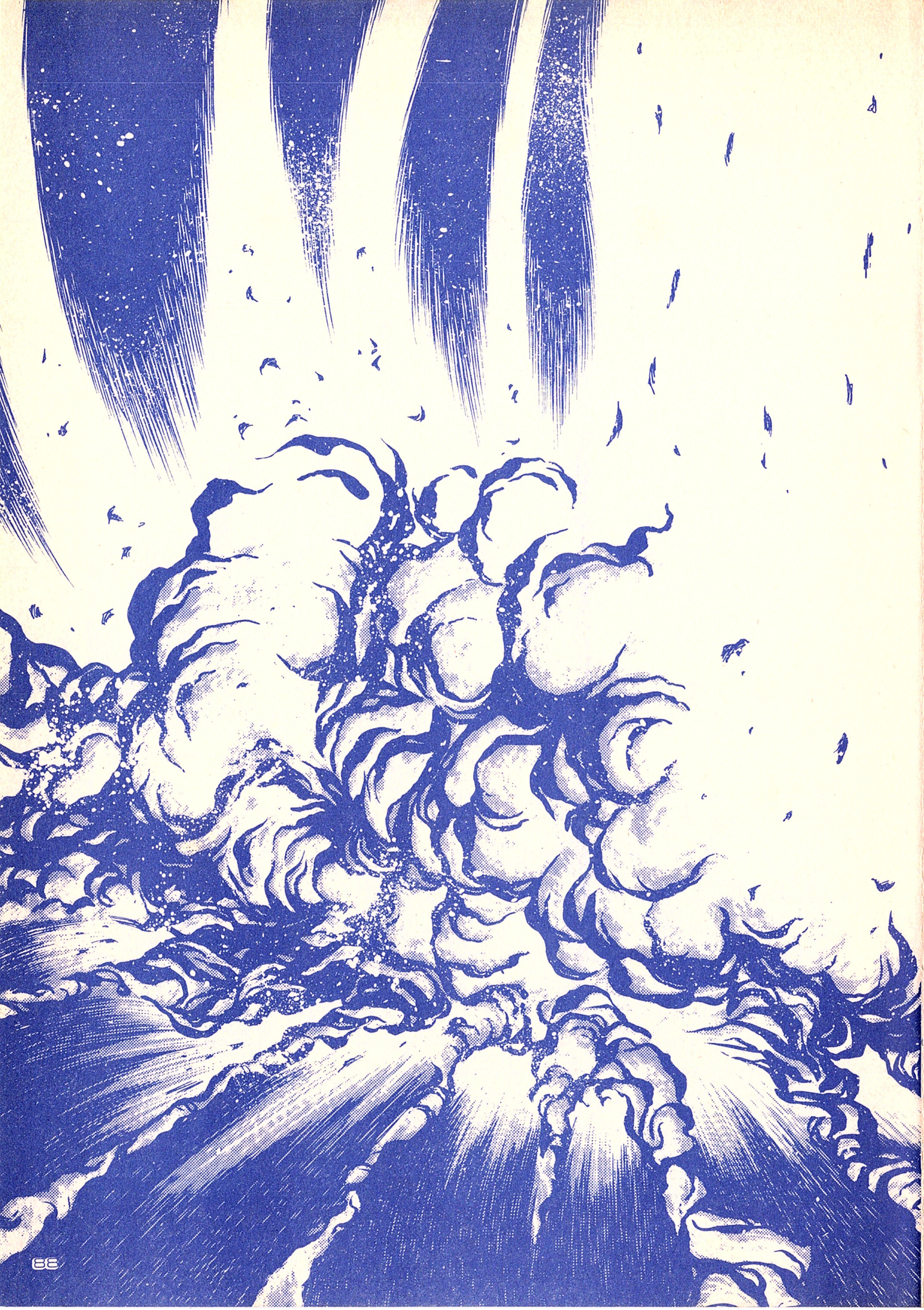

役立たずが三人になっちまったじゃねえか



治療は一体——
ドン
な、何だ今のは——
おそらく
「爆炎」だな——
何！


オオッ イヤだ イヤだ
シンは他の者の相手をすればいい——
本当にそうしてもらえると有り難いな
それにしても——
あの・お方が・仰せられた通り——侍の身でありながら「爆炎」を唱えるとは
魔法使いですら唱えられる者も少ないと云うのに——
ピクッ
恐ろしい若僧よな——

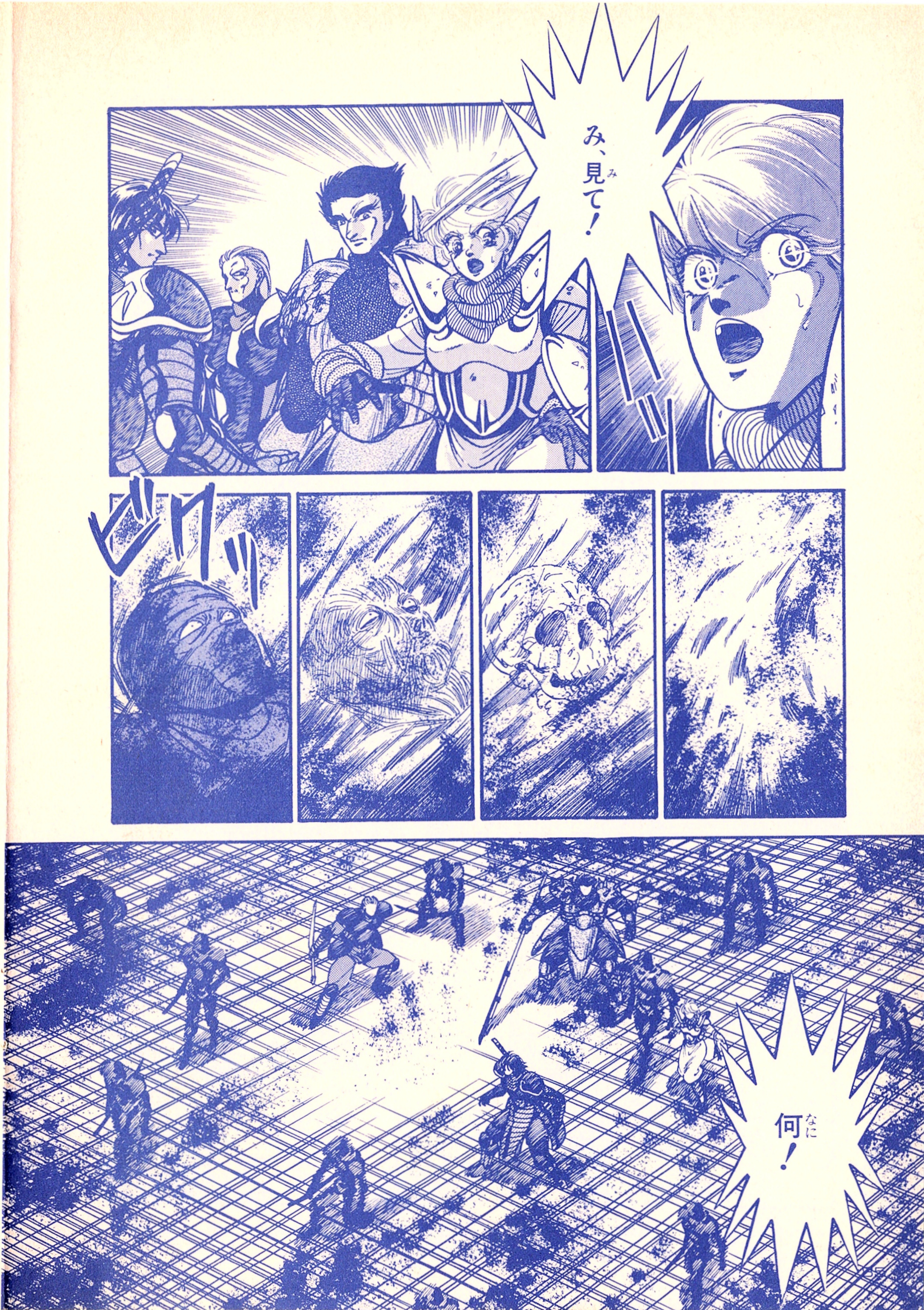




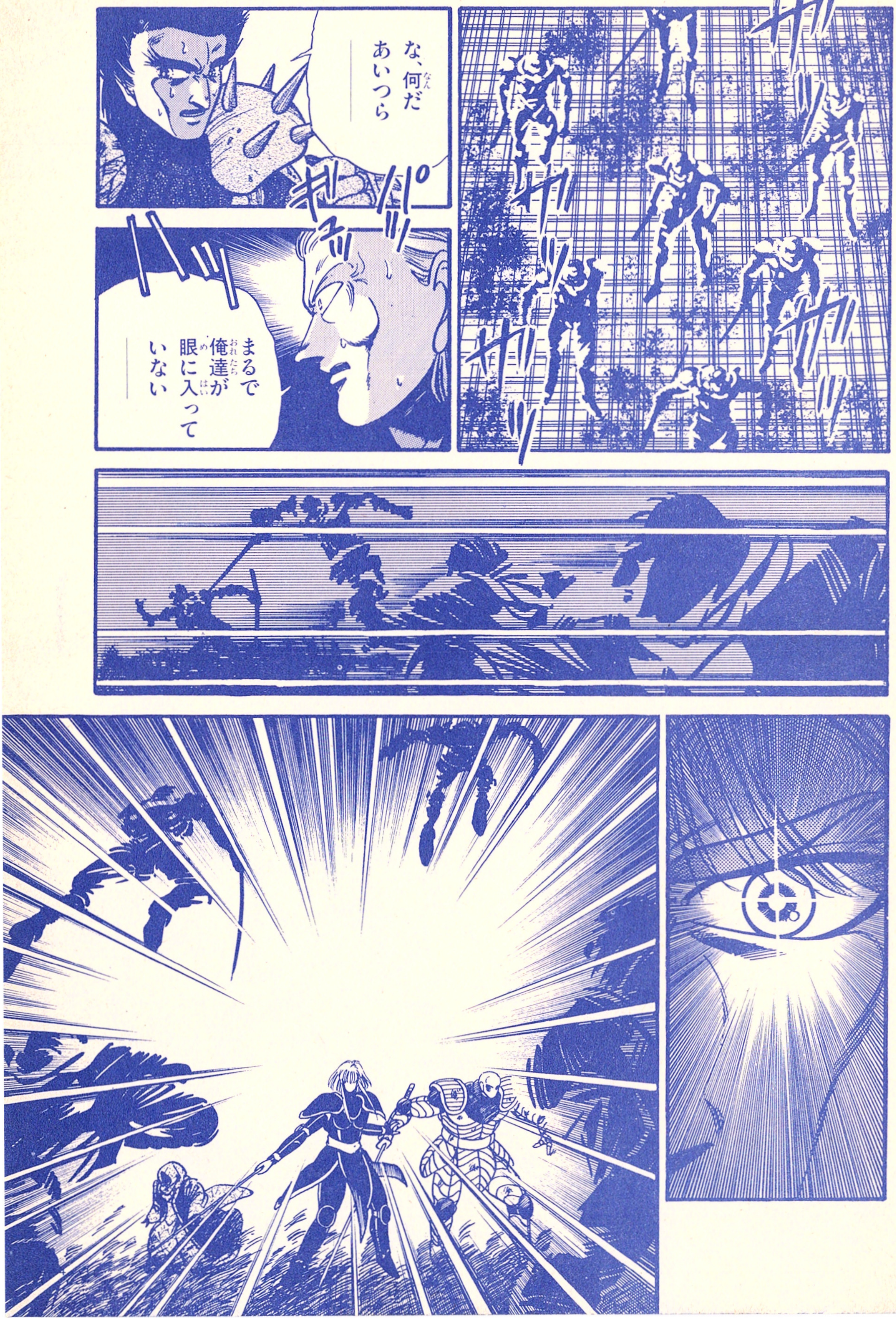

全員消し炭か
とんでもない呪文だな……
チラ



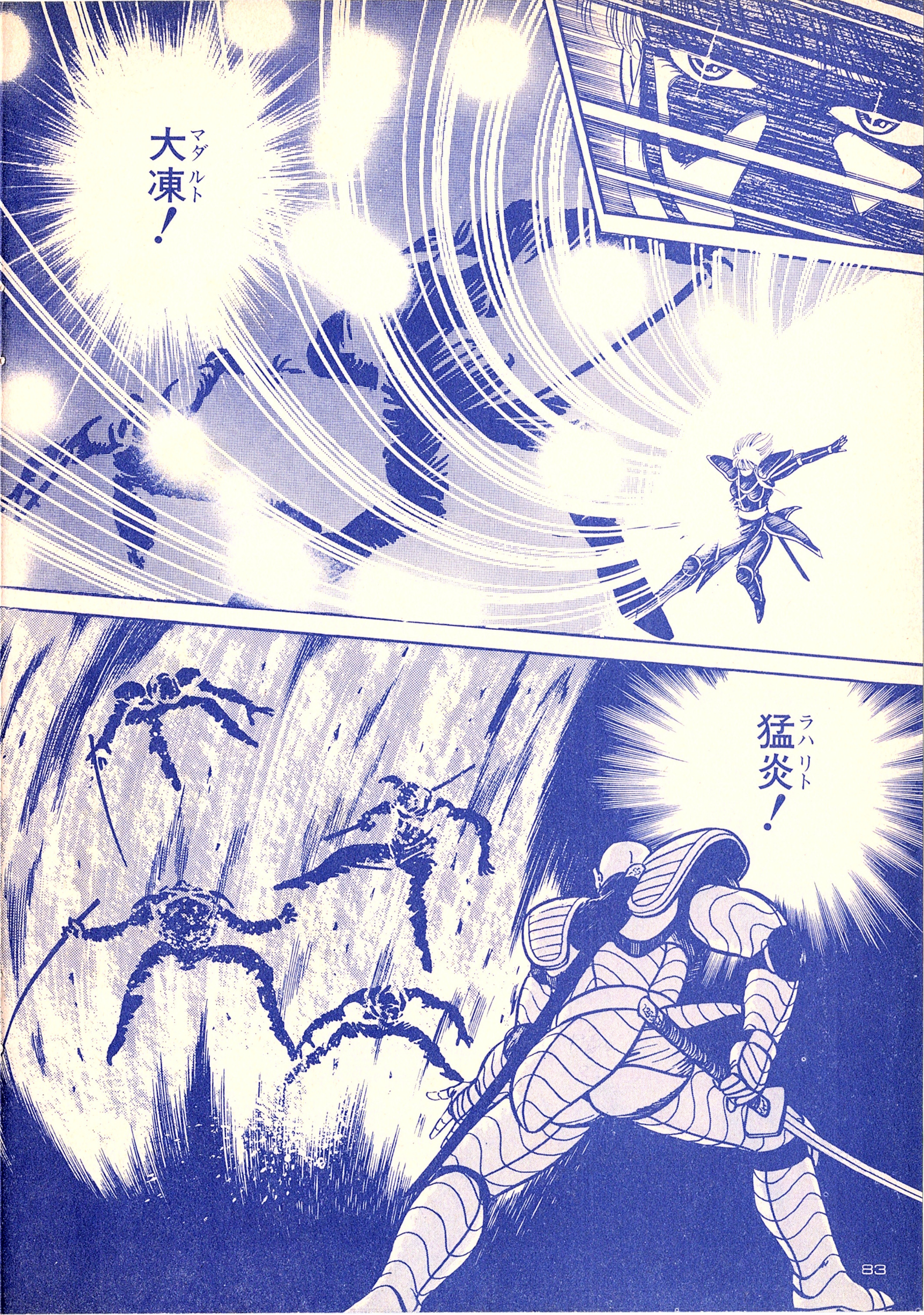
＊呪文を唱える職業を選択した者は、選択した時点で全ての呪文をその意識下に教授される。経験を重ね、その呪文を使いこなすだけの実力を得た時、初めて呪文を唱えることが可能となる。

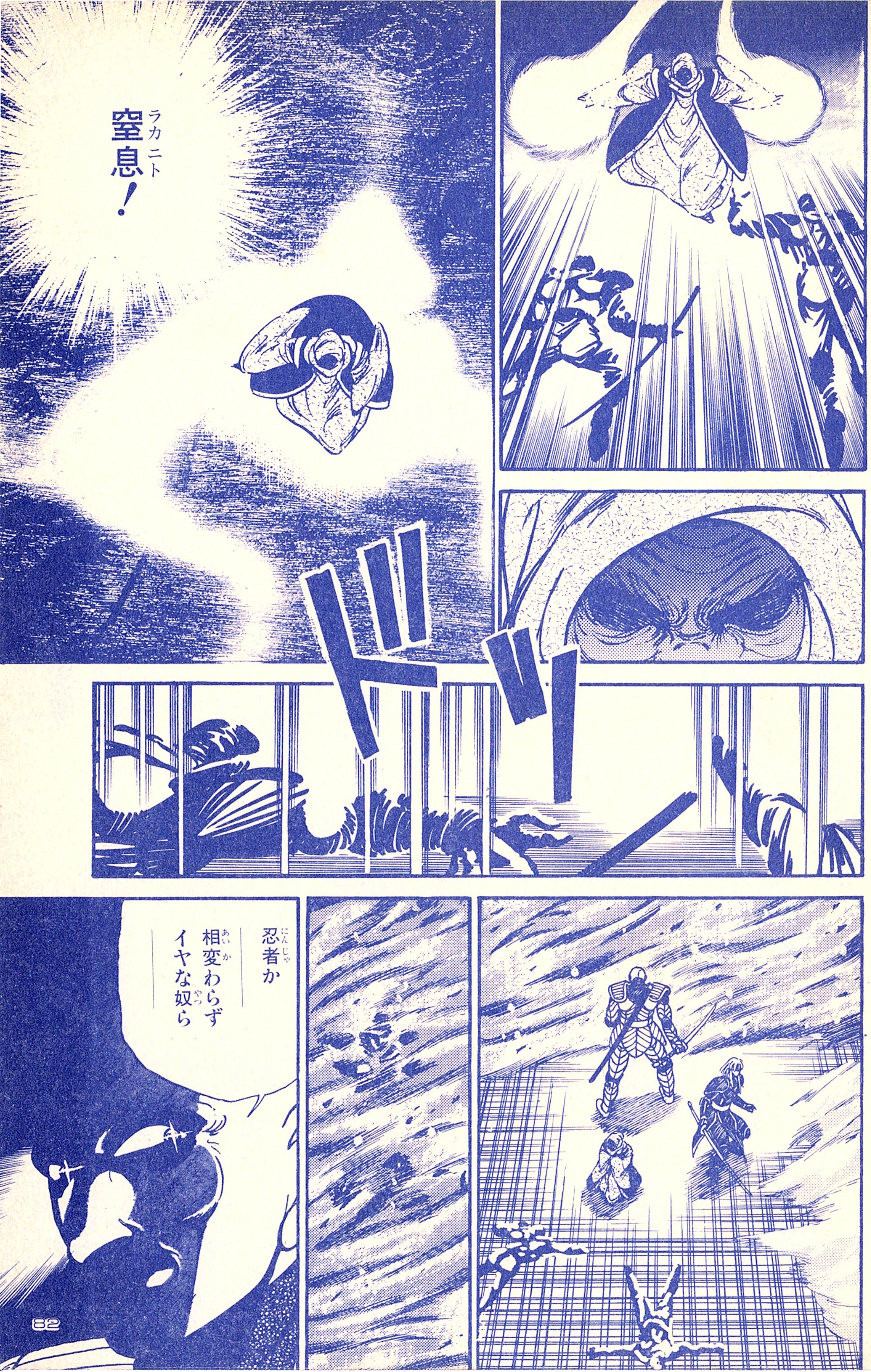


み、見て！
ビクッ
何！

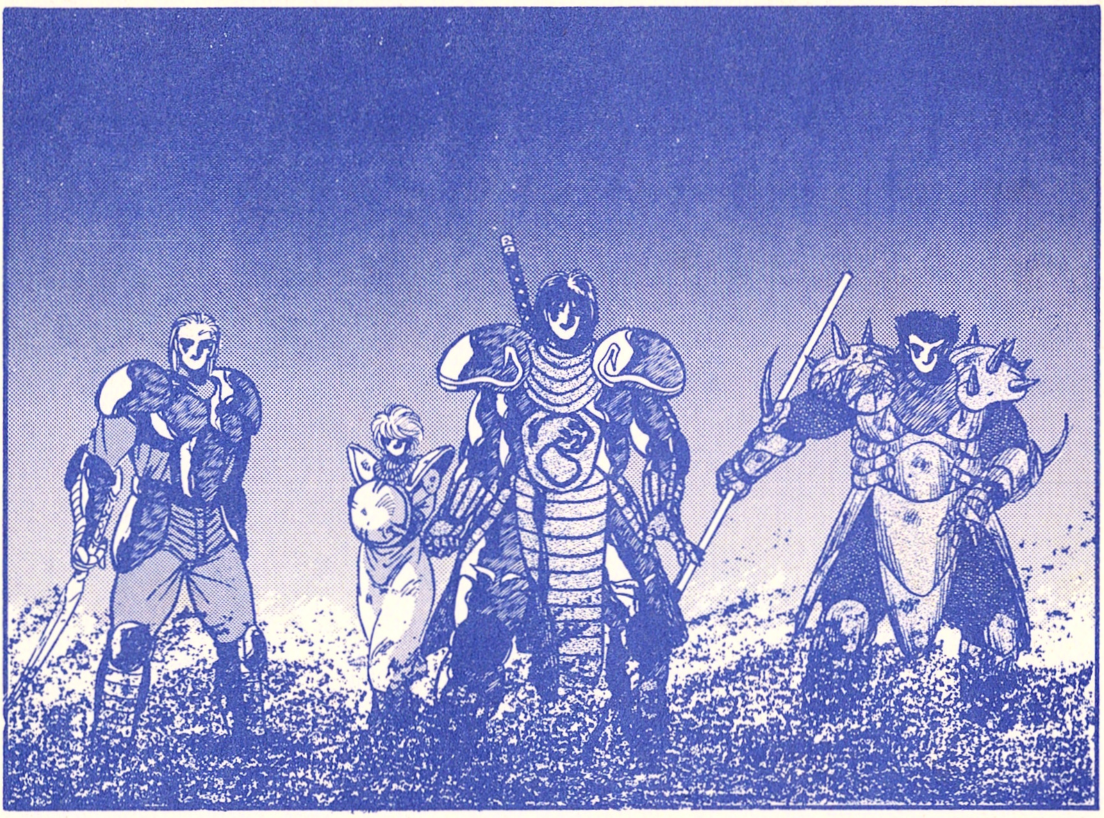


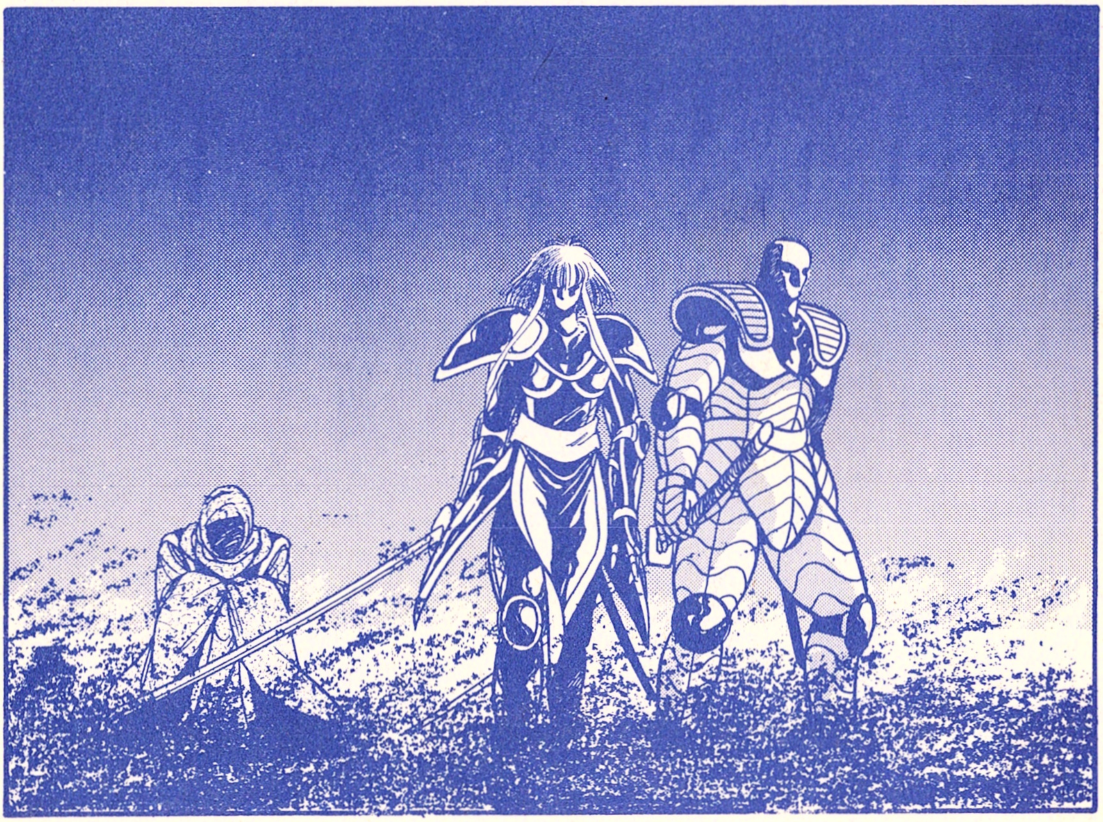
ザッ
ザッ
ザッ
ザッ
な、何だ
あいつら
キッ
パッ
ハッ
まるで
俺達が
眼に入って
いない

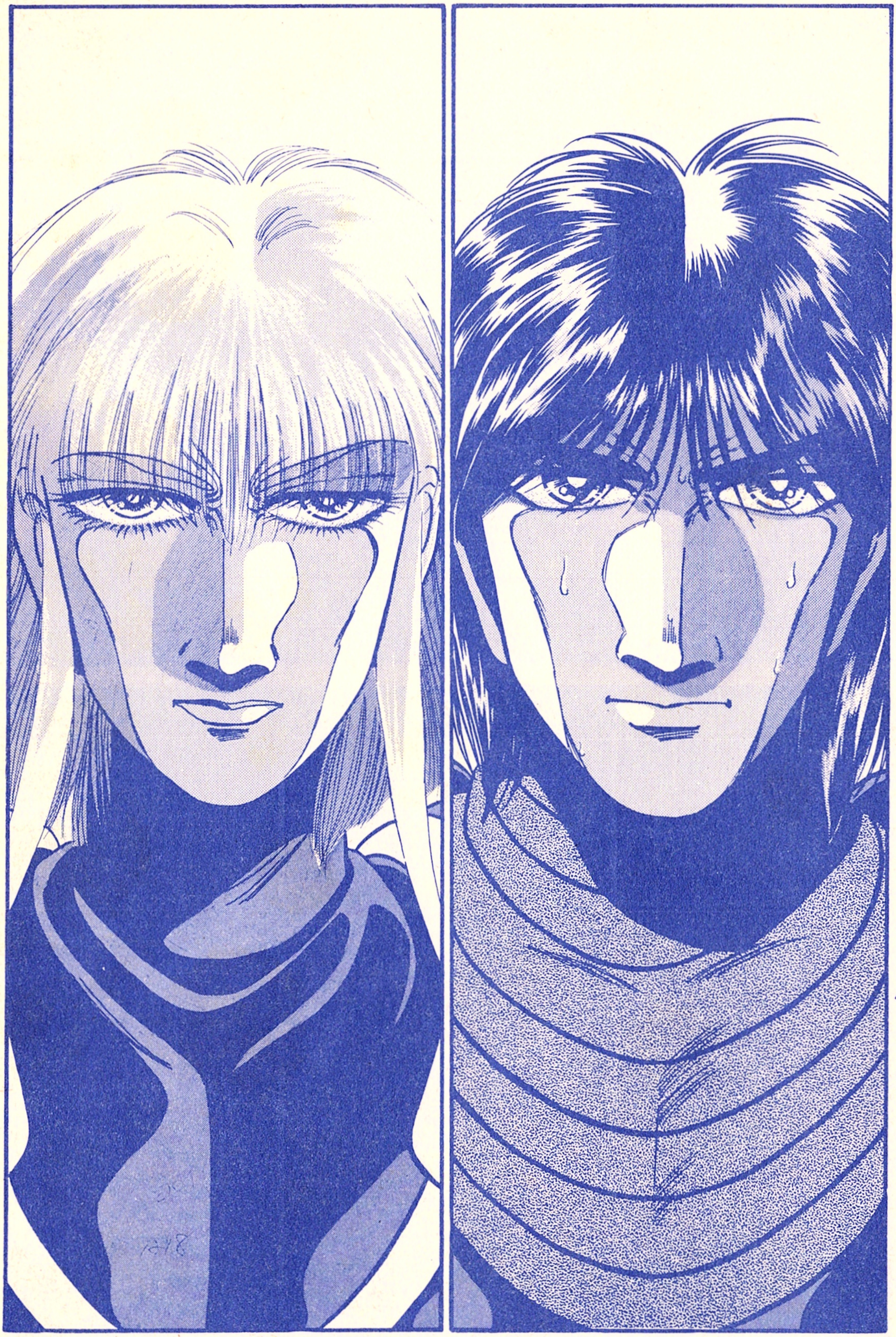

大凍（マダルト）！
猛炎（ラハリト）！


窒息(ラカニト)!
ドッ
忍者(にんじゃ)か
相変(あいか)わらずイヤな奴(やつ)ら


まだ一人残っていたか!
全く反吐が出るほどイヤな奴らだぜ――
なっケイ……





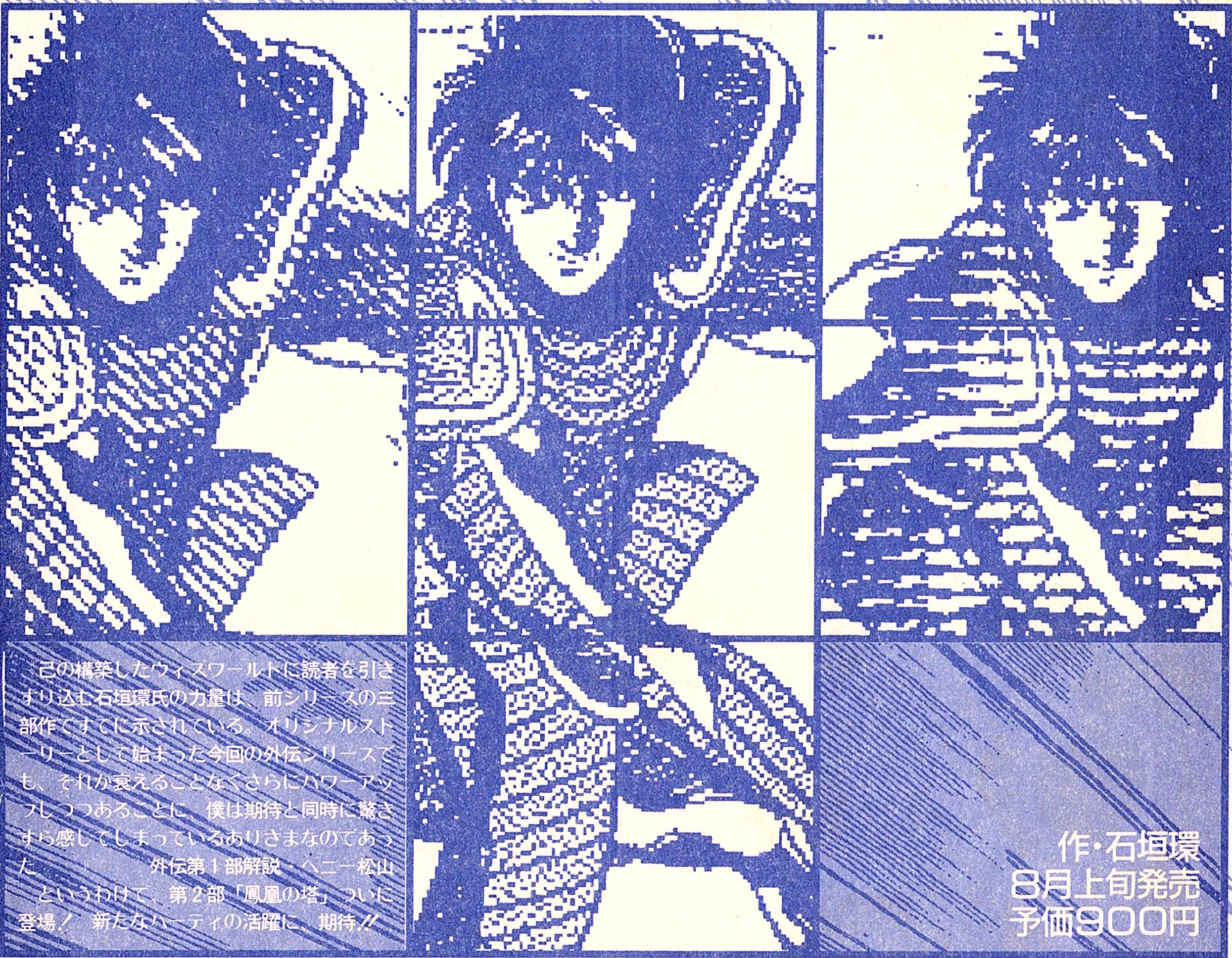


「鳳凰の塔・前編」は8月上旬に単行本化されます!!お楽しみにっ!!

次号Vol.14（7月6日発売）につづく！

ウィザードリィ外伝第2部・前編

鳳凰の塔



己の構築したウィズワールドに読者を引きずり込む石垣環氏の力量は、前シリーズの三部作ですでに示されている。オリジナルストーリーとして始まった今回の外伝シリーズでも、それが衰えることなくさらにパワーアップしつつあることに、僕は期待と同時に驚きすら感じてしまっているありさまなのであった
外伝第1部解説・ペニー松山

というわけで、第2部「鳳凰の塔」ついに登場！ 新たなパーティの活躍に、期待!!

作・石垣環
8月上旬発売
予価900円

コミック版

リンクの冒険

作・末将崎雄
8月上旬発売
予価900円

あの傑作ゲームが、ついに登場！

かつて“勇気ある少年”が、トライフォースを集め、魔王ガノンを討ち破り、そしてゼルダ姫を救った。ゼルダ姫はトライフォースの力を満たす6つの神殿を建て、その輝きで魔族より国を守った。6神殿にはそれぞれ“勇気ある少年”の像がたてられ、魔の脅威は去ったかに見えたが……!? 名作の誉れ高き、「ゼルダの伝説」に続き、巨匠末将崎雄が描く究極のファンタジーコミック！ ここに、新たなるリンクの冒険が、その幕を開くのだ！

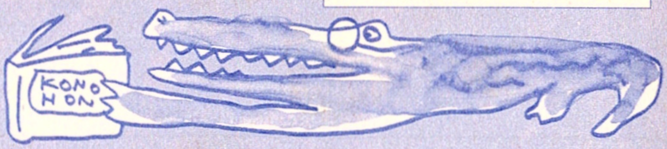
JICC出版局

書店にない場合は当社までお問い合わせ下さい。☎03-234-4621 ※価格はすべて税込みです。

TVゲーム世代のためのスーパーブックガイド

by柴尾豊太郎

この本を読め!!



第九回『アド・バード』

椎名誠著　集英社

こんな小説をぼくは待っていたのだ

もともと破滅もののＳＦを読むのは大好きだった。

人類が破滅の危機に際し、かろうじて生き残った、一にぎりの人々が生存のための戦いをはじめる。

かつてＳＦにはそんな作品が数多くあり、そのどれもが名作だった。

ジョン・ウインダムの「トリフィドの日」、「海竜めざめる」、Ｊ・Ｇ・バラードの「結晶世界」、「燃える世界」、「狂風世界」、トマス・Ｍ・ディッシュの「人類皆殺し」、それからジョン・クリストファーの「草の死」や「大破壊」、ロベール・メルルの「マレヴィル」、小松左京の「復活の日」。まだまだ、いくつでもある。

破滅ものの魅力はやっぱり、ぼくらの住んでいるこの世界が異世界へと変貌していくプロセスにあるのだろう。

ある種の恐怖感が、寂寥感が、漂うなか、世界は破滅にむかって着実に変わっていく。その変わるということが読んでいるぼくらにとって、いいようもないほどの感動をあたえてくれるのだ。

残念なことに最近ではそんな破滅ものはとんと見かけなくなってしまった。おもしろい破滅ものを読みたいのに読めない。その理由はふたつあると思う。

まず、破滅ものが量産されていた時代を考えてみればすぐわかる。破滅ものは1950年代に数多く生み出された。この時代は「核の恐怖」ということばが支配的な時代で、人類滅亡ということがわりと身近に感じられていた。ところが、なんとなく最近はそんなことに感覚がマヒしてしまっているということ。

そして、もうひとつは映画「マッド・マックス」シリーズの影響だろう。破滅後の世界が大活劇の舞台としてのみ成立する時代になってしまったのだ。

うん。「マッド・マックス」シリーズはものすごく好きなんだけど、そのことを考えると残念な気がする。

そんな現代において、破滅ものを生み出す場合、かなりのくふうと、新鮮な切り口が必要だろう。

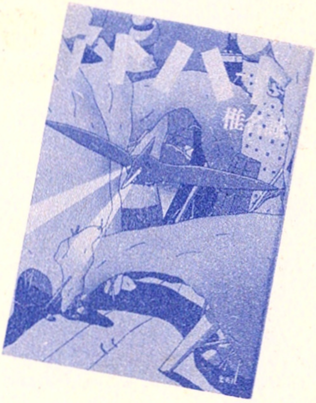
で、「アド・バード」なのだ。これはとにかくすごい小説だ。

何がすごいかというと、まず第一級の破滅小説であるということ。もうひとつ。超一級の異世界ものであるということ。これだけで「この本を読め」といえる――いいきってしまえるのだ。

破滅もののなかで人類を破滅させる原因となるものを列記するだけでも、核兵器、宇宙よりの侵略者、生態系の破壊、太陽爆発、風邪とまあいろいろあるんだけど、「アド・バード」の場合、それは広告（！）なんだ。

バイオテクノロジーで改造された鳥（アド・バード）が大空で群れをなし、広告の文字を書きつづり、地上では木々が異様な姿態で踊り狂う。すべてが広告。そして、そうやって作り出された異常な生物たちが、やがて暴走し、人間たちを破滅に追いやっていく。

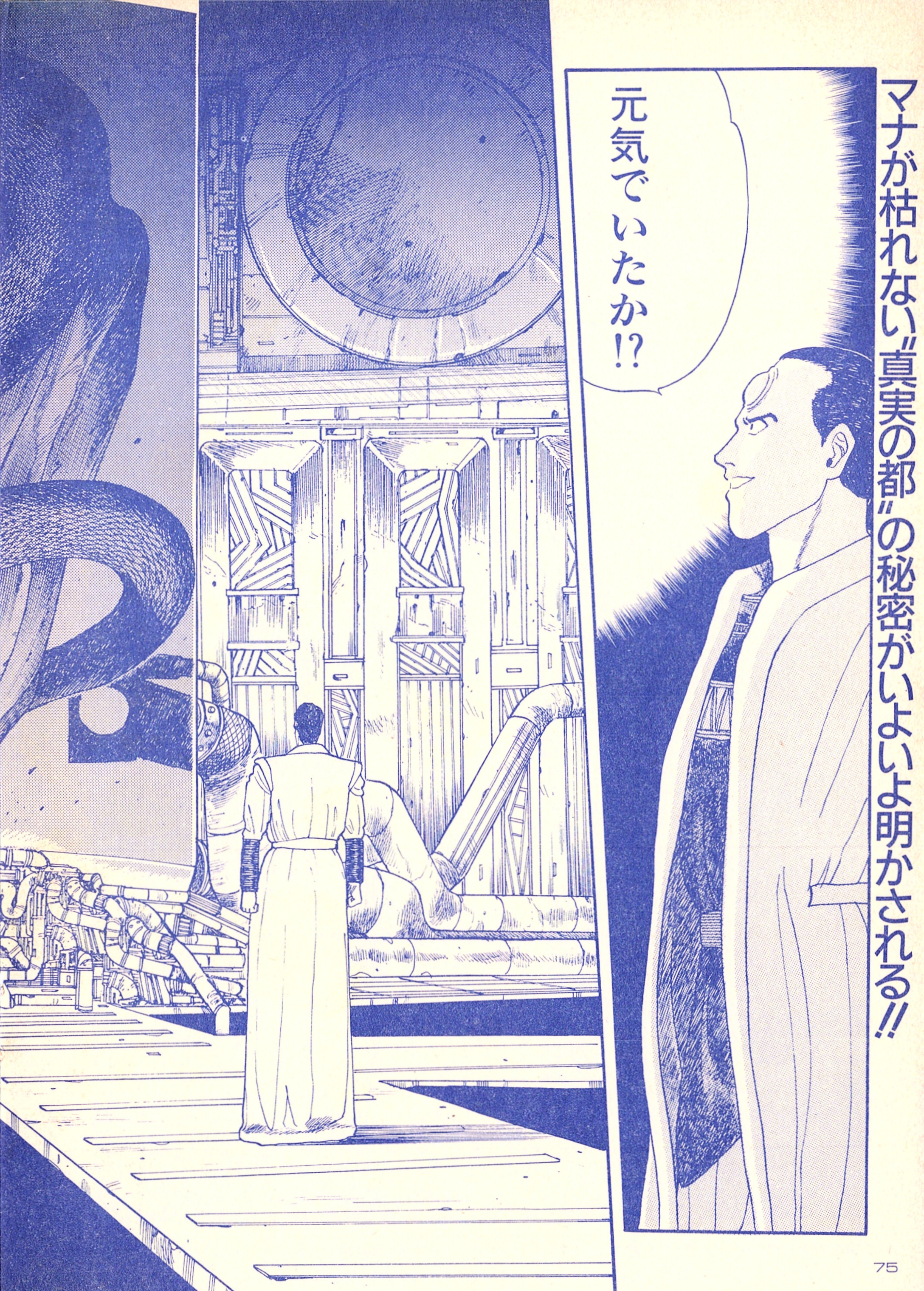
異常生物の克明な描写のひとつひとつが、圧倒的な異世界を構成していくものすごさ。ひさびさに読んでいて「このすばらしい世界をいつまでも楽しみたい。読み終えるのがつらい」と感じさせてくれた小説だった。

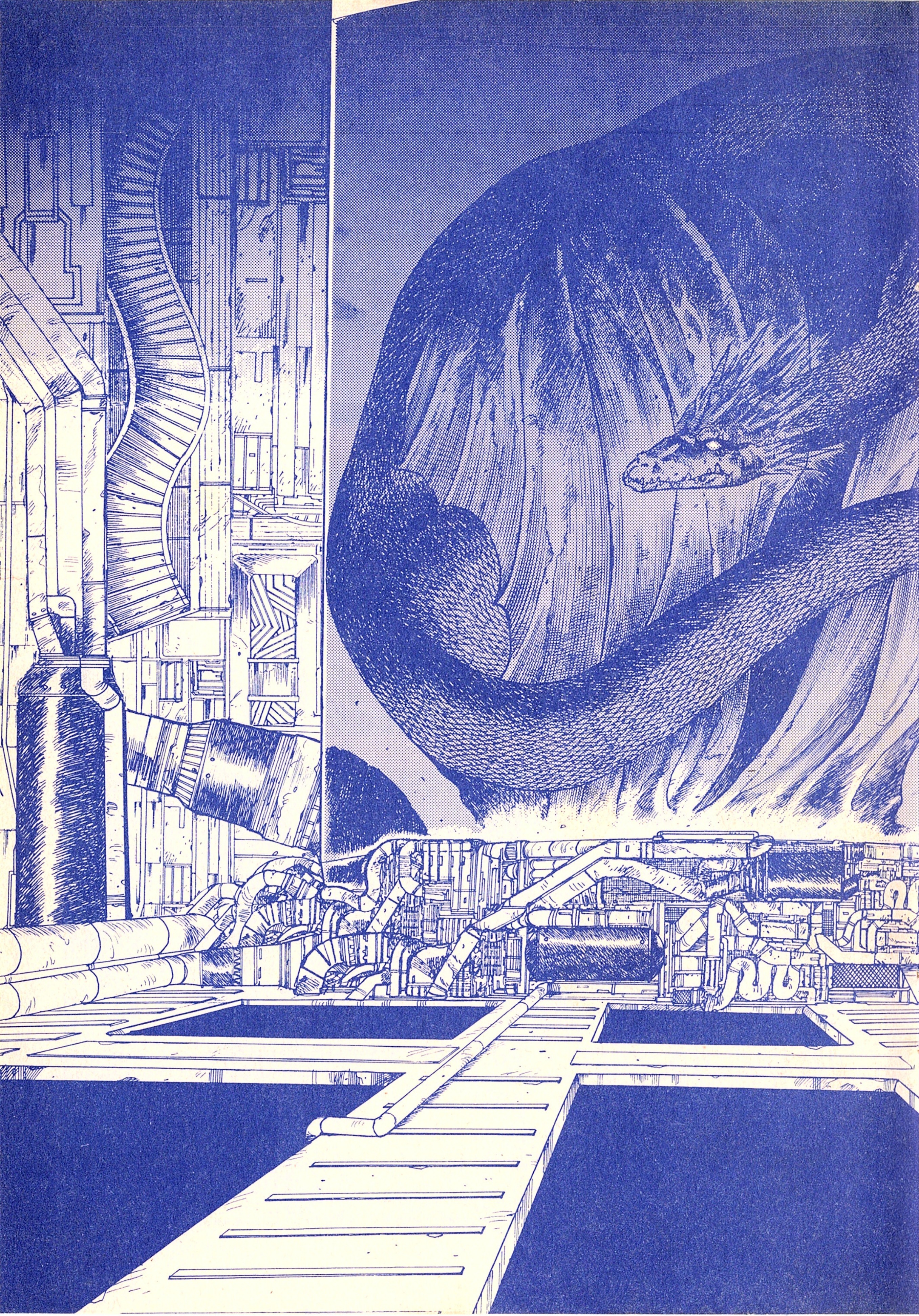


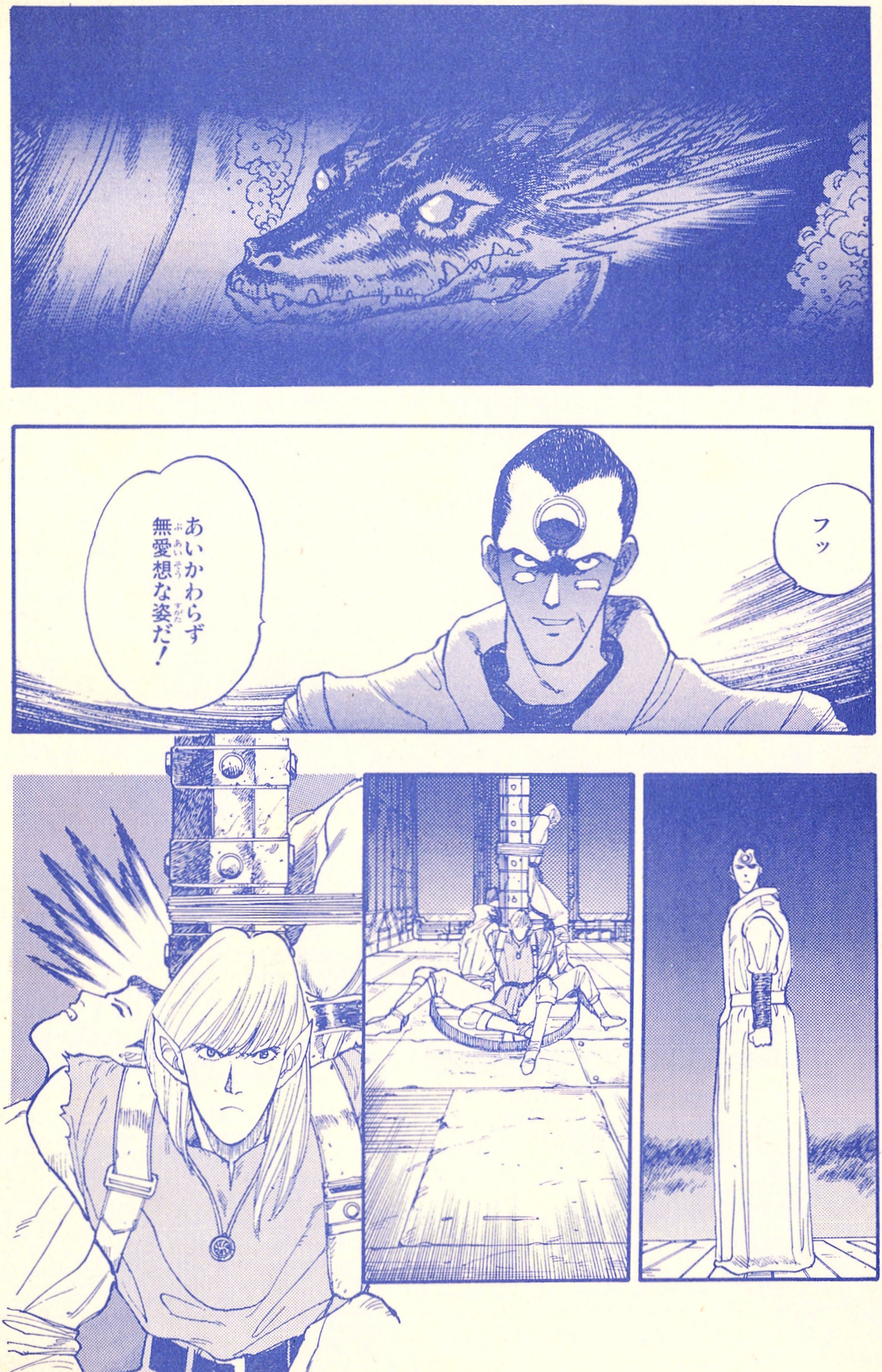
➡「アド・バード」椎名誠著　集英社（1300円）紹介が遅れて、ごめんなさい。こんなにおもしろい小説はもっと早く紹介するべきだったのにね。今まで、紹介した本のなかでも、一番の傑作。この本を読まなければきっと大損するぞ。ひさびさのＳＦらしいＳＦといってもいいだろう

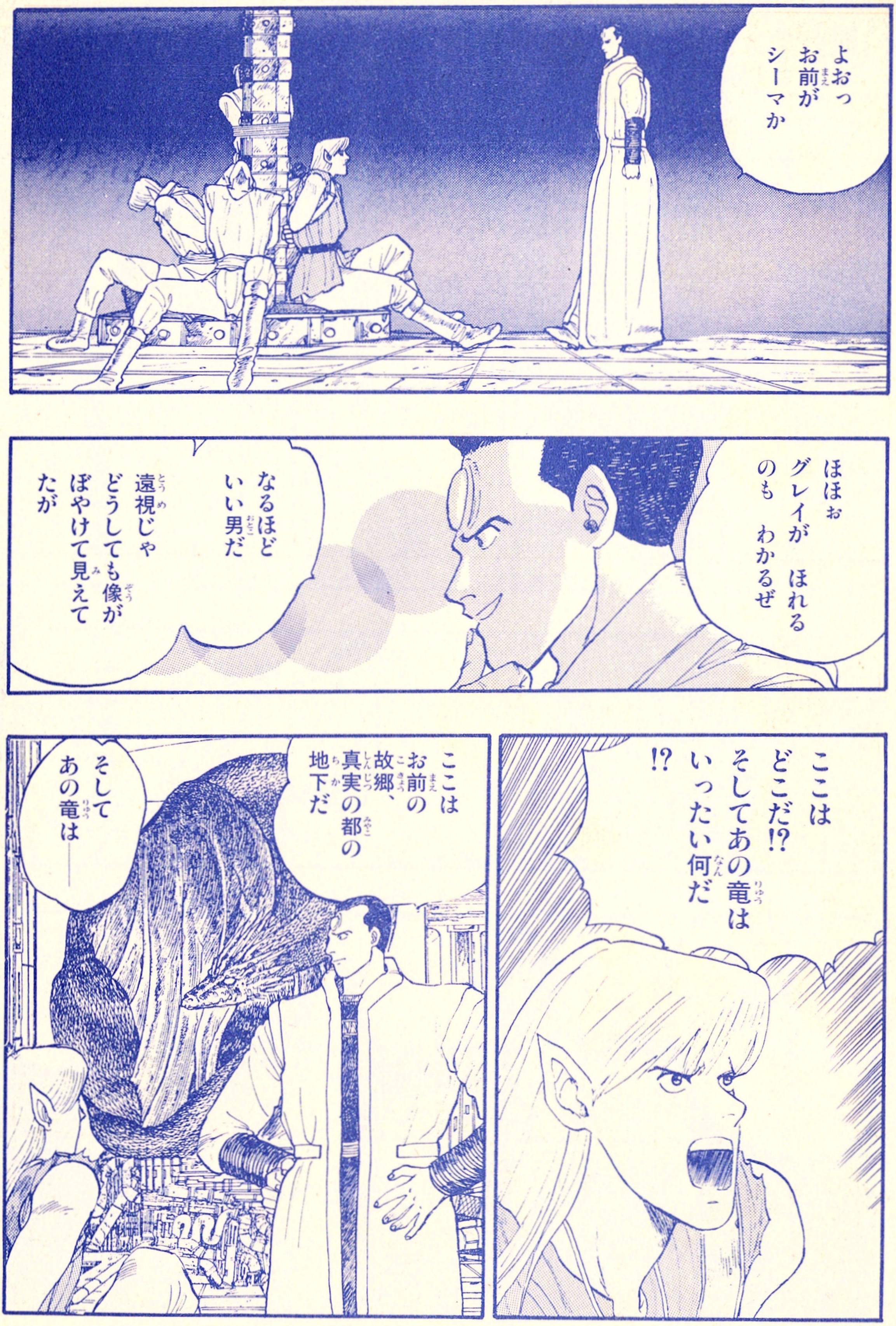


●前回までのあらすじ／すべてを呑みつくす死の砂漠「大喰らい」の謎をついに知ったグレイ。しかしそれは、彼女が愛するシーマ達エルフにとって、残酷な事実だった。苦悩するグレイとアクィナスとの最後の闘いは近い!!


元気でいたか!?
マナが枯れない"真実の都"の秘密がいよいよ明かされる!!

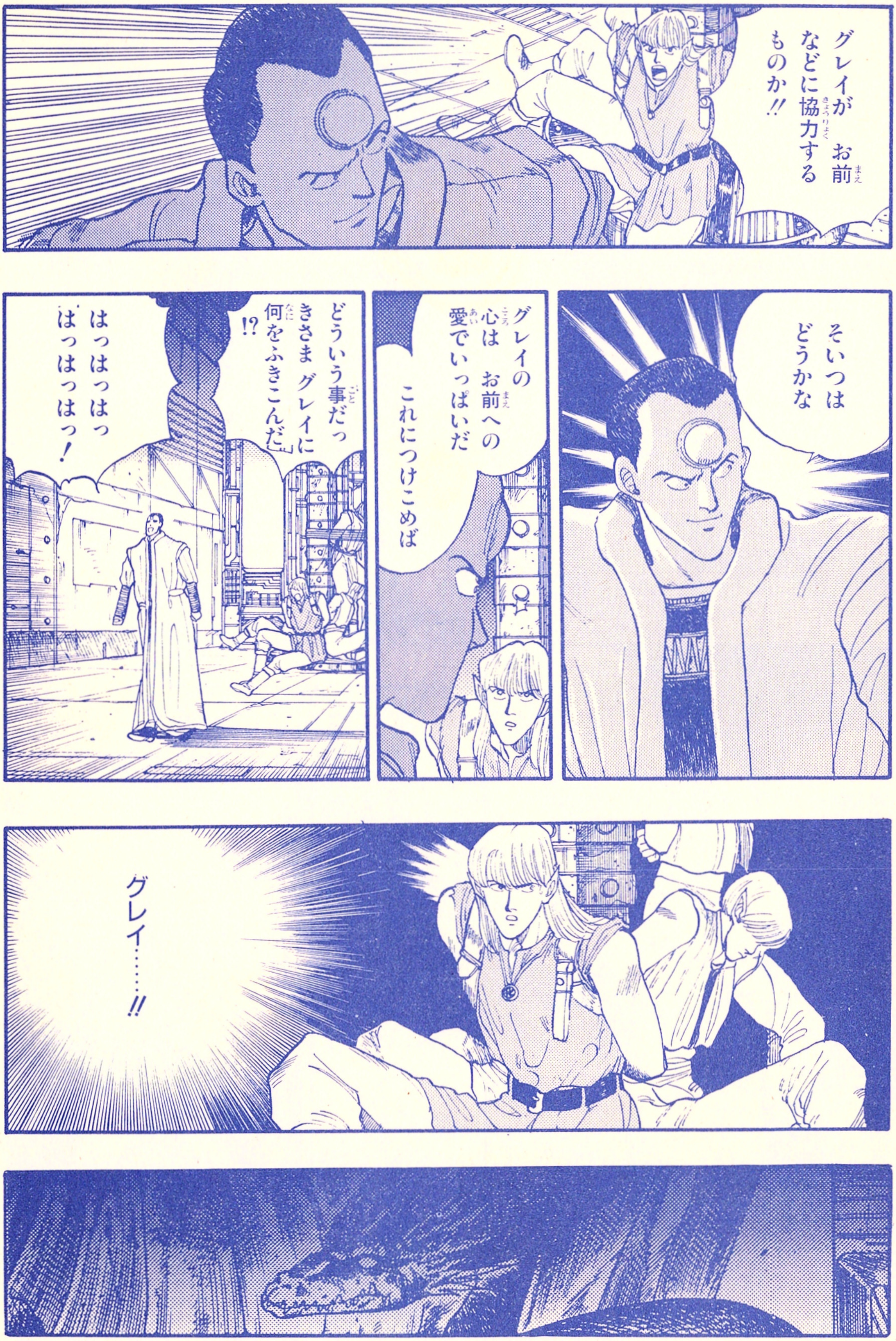


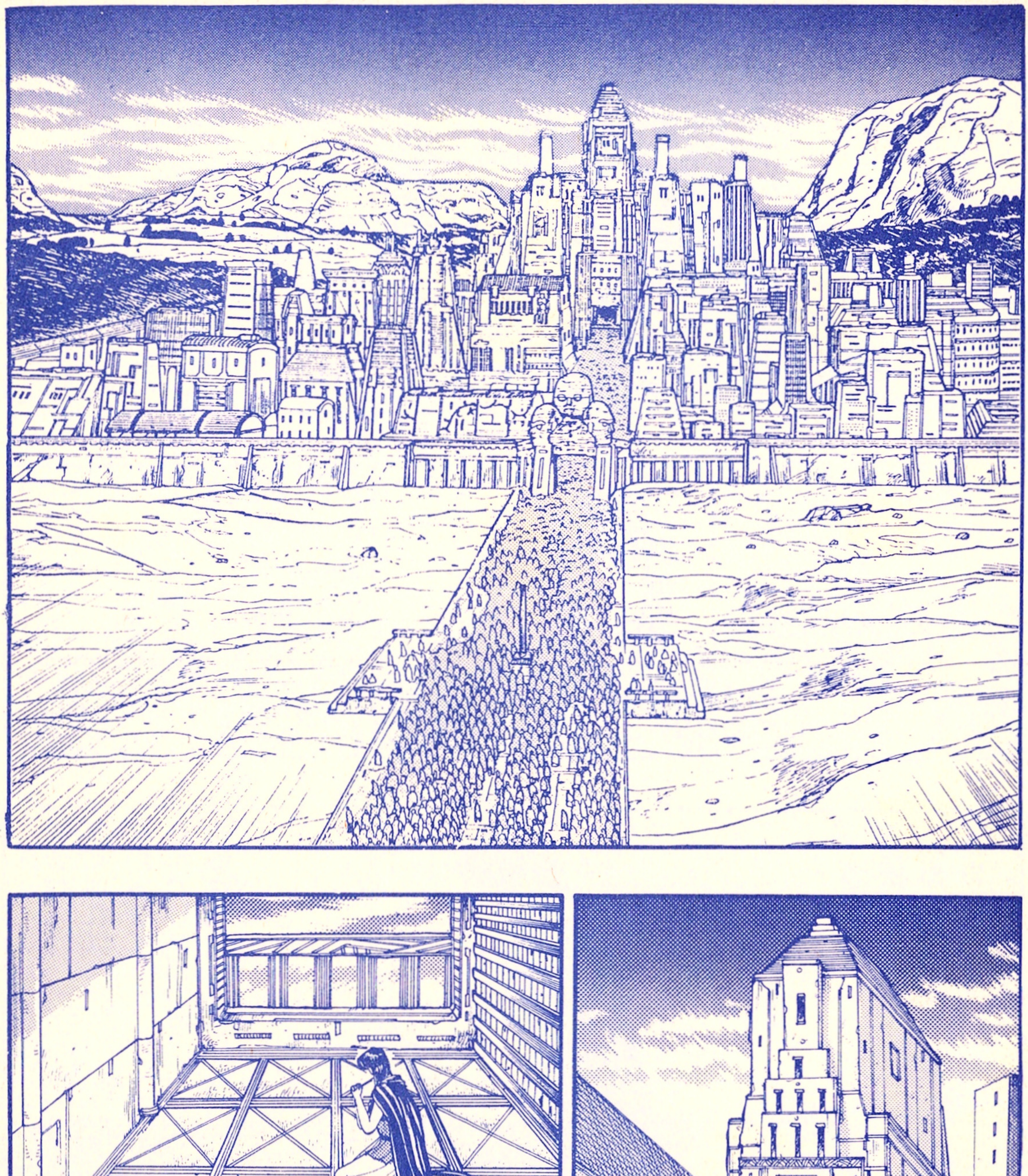

フッ
あいかわらず無愛想な姿だ!

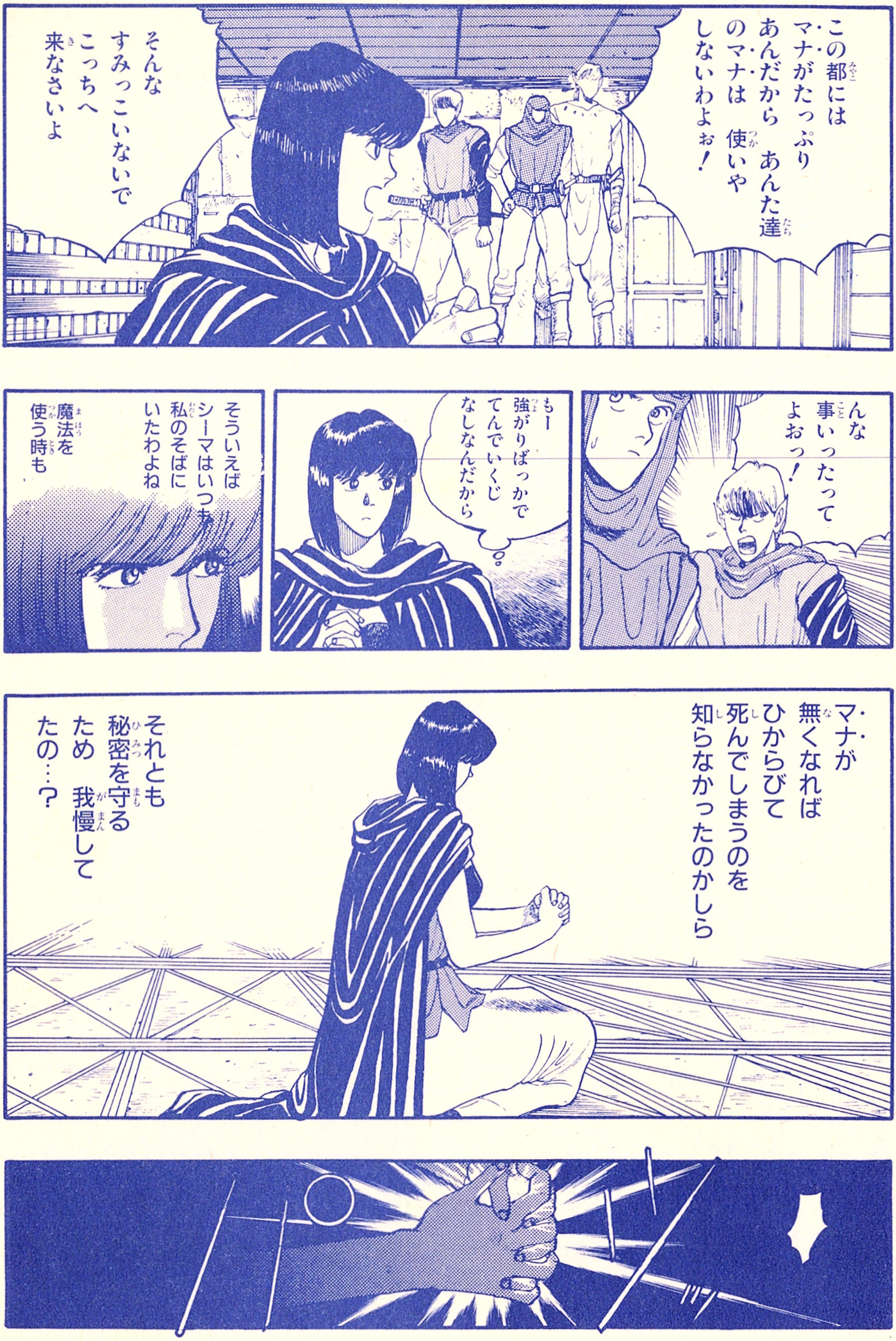

よおっ
お前がシーマか
ほほぉ
グレイが ほれるのも わかるぜ
なるほど
いい男だ
遠視じゃ
どうしても像が
ぼやけて見えてたが
ここは
どこだ!?
そしてあの竜は
いったい何だ
!?
ここは
お前の
故郷、
真実の都の
地下だ
そして
あの竜は——


この真実の都の心臓部だ！
？どういう事だ？
お前もここに住んでいたのだから　よくわかっているはずだ
この都だけは無限のマナに満ち未だに魔力の恩恵で繁栄している……
この竜か!?
そうだ
どういういきさつで竜がここに　こうしているのか　わからんがこの竜の体から発するマナを利用し
その魔力でこの都は生きているのだ!!

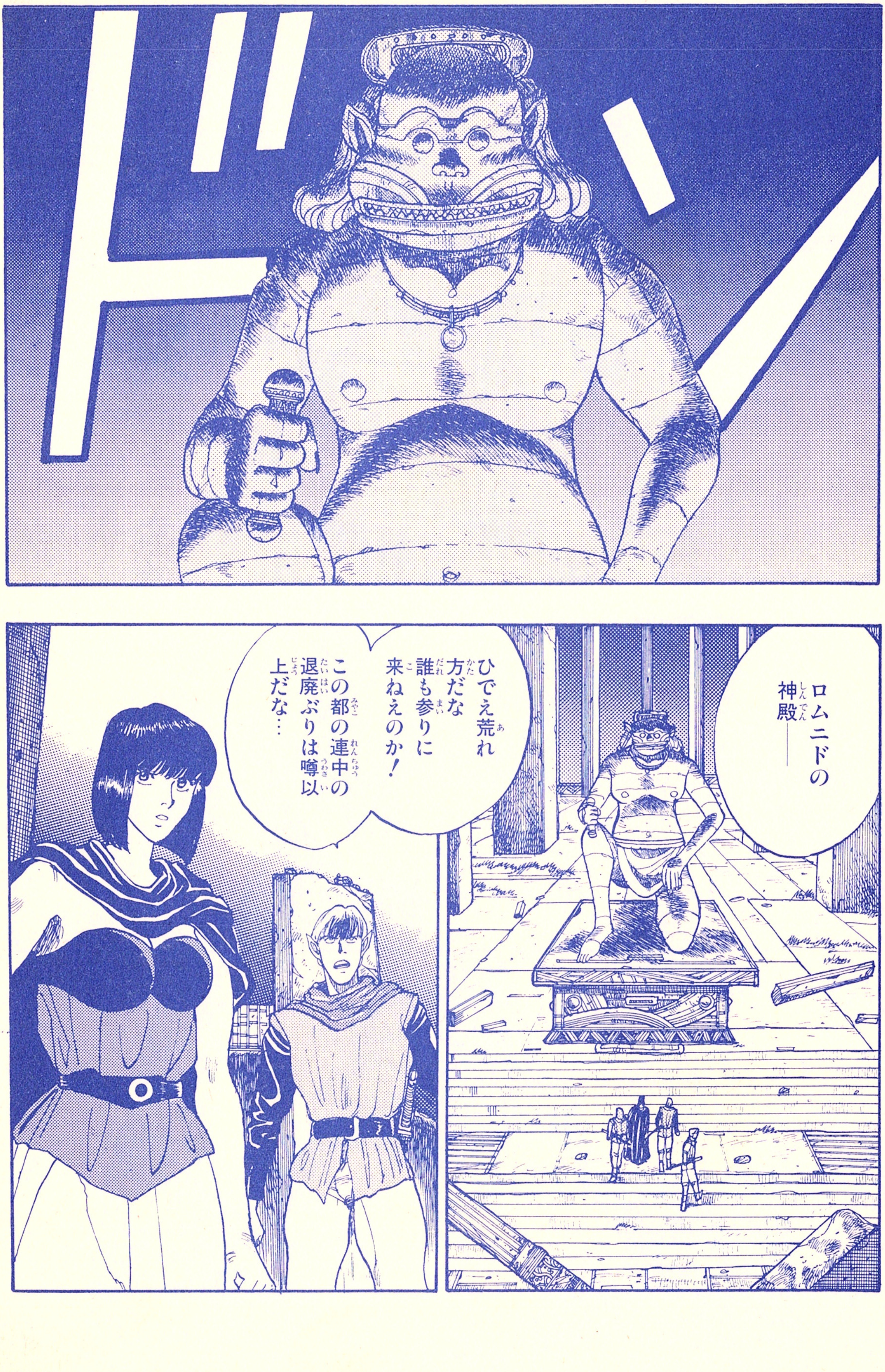

この都は この竜を喰らって 生きているわけだ
くっくっくっ 面白い話だろう
だが この竜も 老いた! あと10年と 生きていまい!!
こんな くそのような 都に使いつぶされるより 私が使った方が 竜も本望だろう
この竜と エルフ達のマナが これだけ あれば もう充分だ
術も、ネルザの森で の実験で熟練した!
あとは グレイが 来るのを 待つだ けだ!

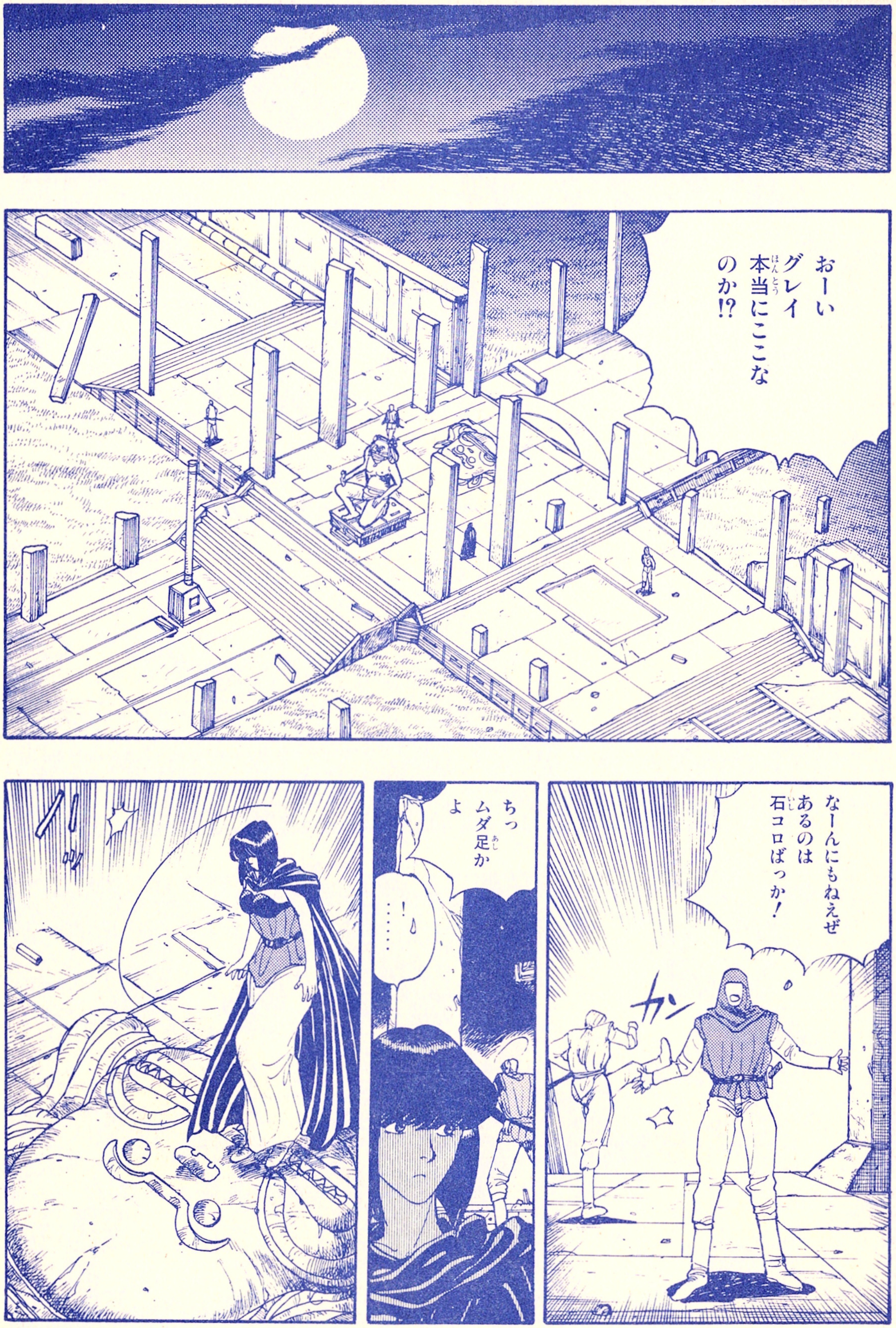

グレイが　お前などに協力するものか!!
そいつはどうかな
グレイの心は　お前への愛でいっぱいだ
これにつけこめば
どういう事だっ　きさま　グレイに何をふきこんだ」!?
はっはっはっ　はっはっはっ!
グレイ……!!

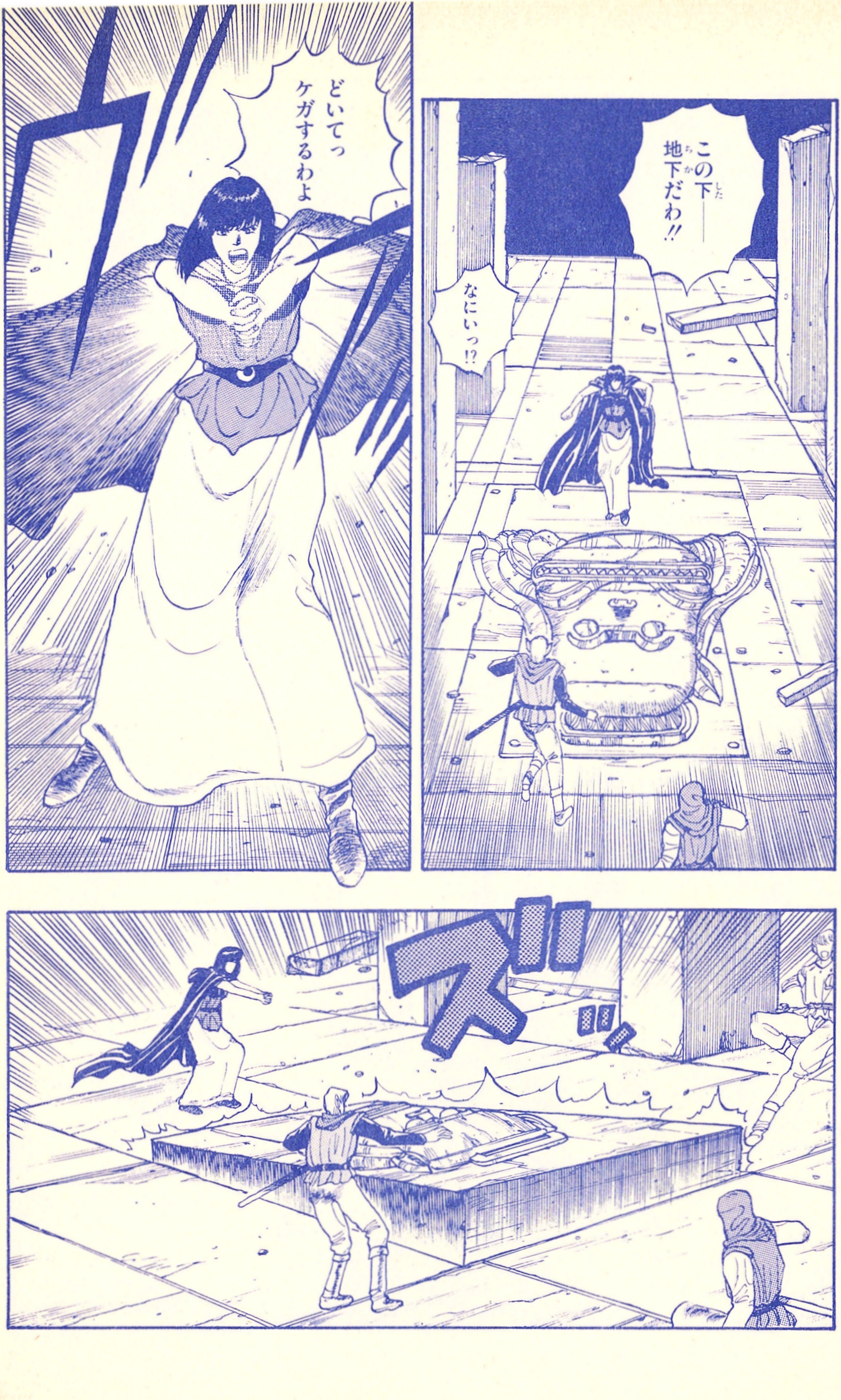


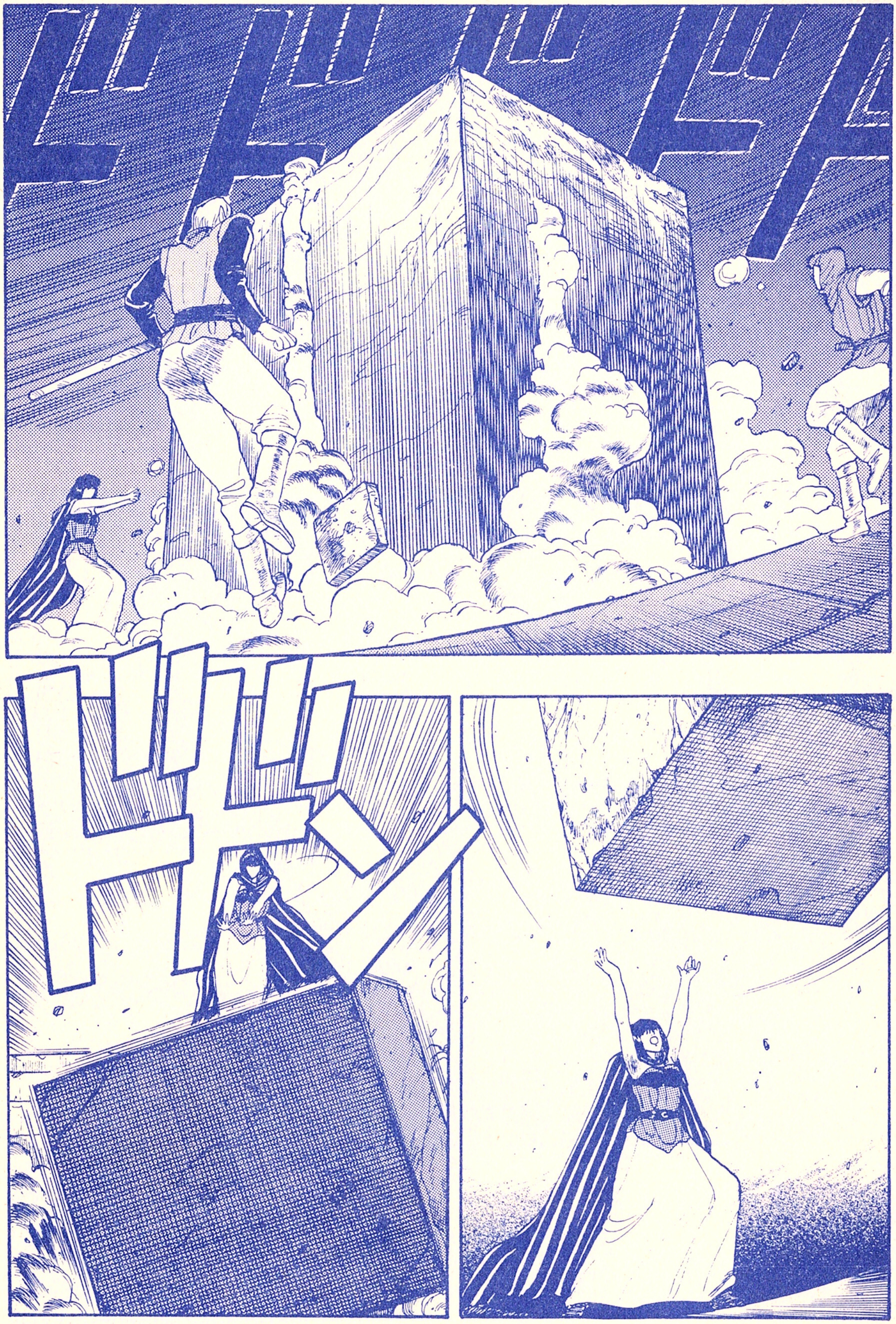

この都には
・・マナがたっぷり
あんだから　あんた達のマナは　使いや
しないわよぉ！
そんな
すみっこいないで
こっちへ
来なさいよ
んな
事いったって
よおっ！
もー
強がりばっかで
てんでいくじ
なしなんだから
そういえば
シーマはいつも
私のそばに
いたわよね
魔法を
使う時も
・・マナが
無くなれば
ひからびて
死んでしまうのを
知らなかったのかしら
それとも
秘密を守る
ため　我慢して
たの…？
！

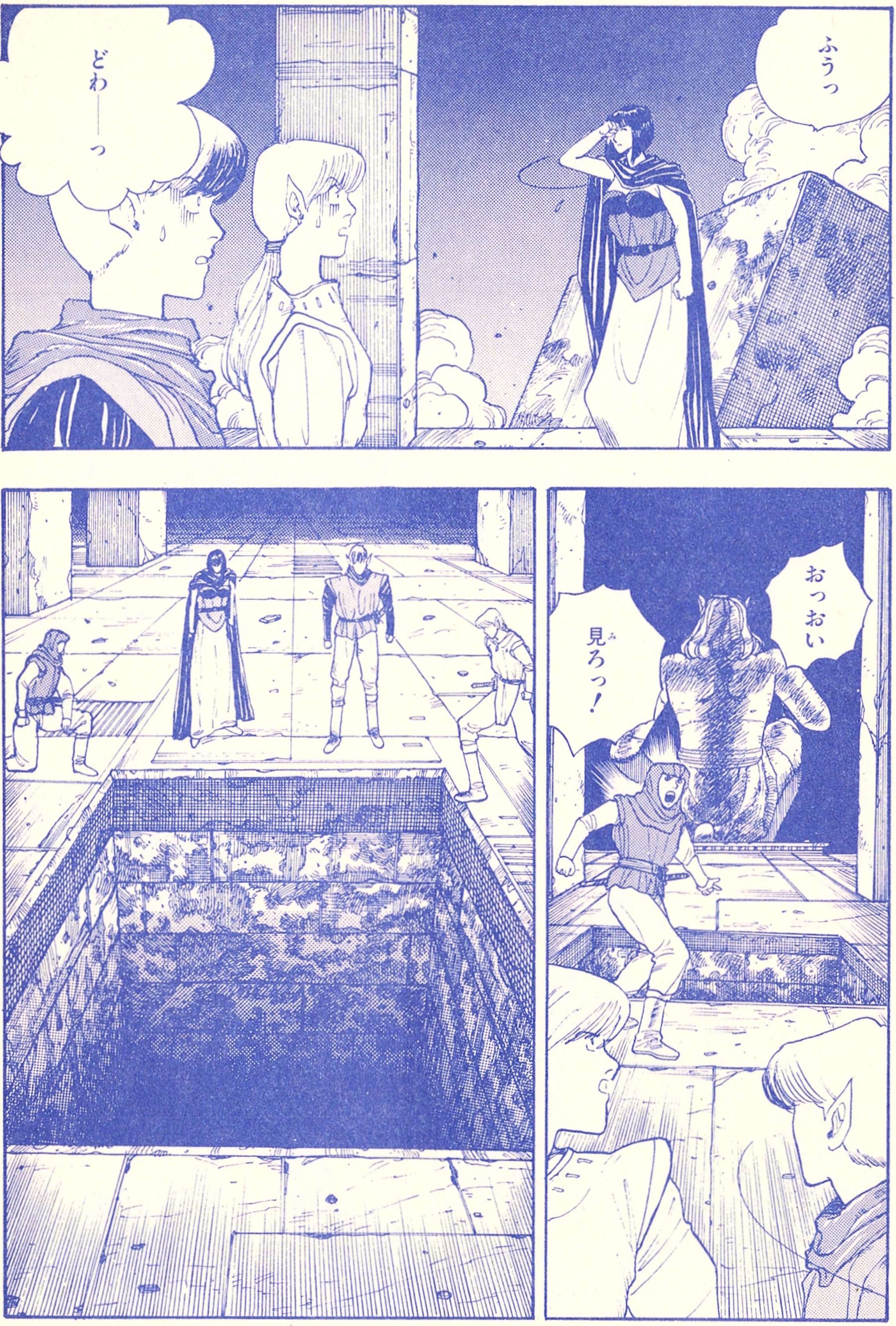

また
思ったとおり
すごいマナだ！
なぜ
この都には
こんなにマナが
あるの!?
ヴウーーーンッ
これは…!?


ドン
ロムニドの神殿――
ひでえ荒れ方だな
誰も参りに来ねえのか!
この都の連中の退廃ぶりは噂以上だな…


おーい
グレイ
本当にここなのか!?
なーんにもねえぜ
あるのは石コロばっか!
カン
ちっ
ムダ足かよ
……!


この下地下だわ!!
なにいっ!?
どいてっ
ケガするわよ
ズ


ドドン


ふうっ
どわ――っ
おっおい 見ろっ！

"真実の都"で再会したグレイとアクィナス。ついに最後の闘いが始まる!!



次号(Vol.14 7月6日発売)につづく!!



本当に死んでしまうのか!? てっぽう丸最後の秘技が明かされる!!


連載が終わってしまうぞーっ
びっくり
またえんぎでもない
作者が
死んだのか
もっと遊びたいそうじゃ
やばい!! 今の内に
となりの外薗氏のマンガに緊急避難だ
ムリじゃ
顔が顔が
そうかな
ちがいすぎる



死んでしまうとは何事じゃ　てっぽう丸、カムバック…!!

Wizardry・II

小説ウィザードリィII

風よ。龍に届いているか

第18回

千メートルにも及ぶ断崖絶壁――。
登攀不可能とされるスケイルに挑み、
仲間の救出を決意するジヴラシア。
死の間際まで戦いを求めるのは
戦闘機械・忍者の宿命なのか――。



作／ベニー松山
イラスト／高橋政輝

〔第十八章〕有志

マイノスが立ち去った後も、俺は庭園に留まっていた。

理由はふたつある。

ひとつはマイノスの奴が持ちかけてきた迷宮への侵入方法が、余りに突拍子もない話だったからだ。

梯子山を攀る――。

普通なら、笑い飛ばして然るべき提案だった。山と言うよりむしろ塔、大地に突き立った巨竜の牙とも見える梯子山の、限りなく垂直に近い壁面をほぼ千メートル攀じ登ろうと言うのだ。

有史以来そんな真似を試みた奴は、たとえそれが百メートルであってもいなかっただろう。翼でもない限り、途中で滑落すれば地面まで真っ逆さまだ。百メートルも加速しながら落下すれば、運気が驚異的に強いホビットであっても助かる見込みはない。

俺たち冒険者がよく使った冗談に、ベイキ女王を口説くのと梯子山を攀るのはどちらが楽か、というのがあった。もっぱらこれは女王の陰口に使われ、問われた者はそれでも山登りを選ぶという落ちがつくのだが、いざ実行するとすればプライドは高くても初な小娘に夜這ったほうがまだ望みがありそうだった。

空中浮遊や飛行の呪文も存在していたという超古代なら、標高千メートルの高みにある火口にでも辿り着くことはできただろう。しかし、その類の魔法技術は失われて久しい。

考えるほどに、不可能に思えてくる話だった。

だが、俺はその話に乗りかけている。

どうやって攀るのかまでは、マイノスは語らずに去った。具体的な方法は、まだ何も判ってはいない。

それなのに、俺はこんな馬鹿げた救出計画に協力する気になっているのだ。

何故か？

前号までのあらすじ

精霊神グニルダの恩寵により、あらゆる外敵から守られ続けてきたリルガミン市。しかしその聖都も原因不明の天変地異に見舞われ、滅亡の一途を辿っていた。異変の原因究明のため王国は多数の冒険者を募り、街の北に聳える禁断の山〝スケイル〟に隠された神秘の宝珠の探索を命じた。

探索を続けて約一年。冒険者たちは自らの能力を磨き、山中の迷宮は宝珠の守護龍ルケブレスの護る最上層を残して全て踏破された。使命の達成は目前であった。そしてついに、主人公ジヴラシアのグループであるガッシュ、マイノスらの善のパーティが最上層の探索に出発したのだった。

しかし翌朝、一行は消息を絶った。捜索隊が急ぎ組織され、ハイランスの指揮する三隊の善のパーティが迷宮へと向かう。一方身動きの取れぬジヴラシアとディー、ザザは王宮に召喚され、王国の統治者ベイキ女王との謁見を行っていた。そこに善のパーティのひとりアルタリウスが現れるが、それはすでにアルタリウスではありえぬ奇怪な生物と化していたのであった。分裂、増殖を繰り返す妖獣に苦戦しながら、重傷を負い生還したマイノスの援護で辛くも女王を救う三人。もうひとりの妖獣エレインが冒険者の宿に向かったのを知り、ジヴラシアとディーはすぐさま転移の呪文で跳ぶ。しかし時すでに遅く、残留組の悪の冒険者は全員妖獣の餌食となっていた。分裂した妖獣たちを全滅するべく、ディーは爆炎の呪文で宿を焼き払う。ジヴラシアは逃げ出したエレインを屠ったが、同時に石化され、同化されかけたところを謎の男に助けられた。その夜、王宮ではマイノスが持ち帰った神秘の宝珠を用い、異変の原因を報告するための晩餐が開かれたが、そこで賢者たちが告げたのは間近に迫る大破壊であった――。

主な登場人物

- ●ジヴラシア……主人公。レベル13の忍者。悪・人間族。この物語の〝俺〟。
- ●ガッシュ……レベル15の戦士。中立・人間族。
- ●ザザ……レベル13の僧侶。悪・人間族。
- ●ディー……レベル13の女魔術師。悪・エルフ。
- ●マイノス……レベル12のロード。善・人間族。
- ●フレイ……レベル13の盗賊。中立・ホビット。
- ●ボルフォフ……レベル13の戦士。中立・ドワーフ。
- ●アルタリウス……レベル13の僧侶。善・ノーム。
- ●エレイン……レベル13の魔術師。善・エルフ。
- ●ハイランス……レベル13の侍。中立・エルフ。他のパーティを率いる。
- ●ベイキ女王……リルガミン王国の若き女王。
- ●ルケブレス……迷宮を支配する龍。〝平衡〟の守護者。

WIZARDRY Ⅱ

風よ。龍に届いているか

あのマイノスが、俺の力が必要だと言ったからだ。

善と悪の戒律が相反するだけでなく、互いに気に食わぬ相手として俺たちは反目し合ってきた。

一応は宝珠探索の一チームを形成してはいたが、仲間と考えていたのは重複する中立のメンバー――ガッシュとボルフォフ、フレイだけで、善悪のパーティ間に友好関係などは存在しなかった。そして、中でも俺と奴は特筆すべき険悪な間柄だった。

そのマイノスが、俺に助力を求めている。人一倍誇り高い王国騎士の末裔が、自ら折れてこの俺に頼んでいるのだ。

そいつが、気に入った。

裏を返せば、マイノスが信念を曲げても構わないと思うほどに、俺にこの計画の成算がかかっているということになる。ならば、賭けてみるのも悪くない。

加えて、俺は以前ほどマイノスを嫌ってはいない自分に気づいていた。命懸けで宝珠を持ち帰ったことを、ザザに聞かされた時から――いや、王宮での戦闘に血にまみれたマイノスが現れた時から、俺はこの優男の常人離れした闘志に一目置いているのだ。失血死寸前であれだけの気迫を保てる者は、そうざらにはいない。

認めたくはないが、俺はマイノスに関して冷静な判断を欠いていたらしい。反りは合わなくとも、頼りになる剣士であることに違いはないのだ。

そして何より、俺自身が迷宮への救出行を望んでいた。他に方策が見当たらない以上、不可能に思える案でも選択の余地はない。

それだけに、マイノスが明朝の出発準備に去った後も、俺はここで断崖の登攀について思案し続けていた。

「いい加減に出てこいよ」

俺は背後の小径沿いに伸びる低木の生け垣に声をかけた。異常気象で枯れかけてはいるが、陰に人が隠れるには充分に葉が残っている。

「うまく隠れてたつもりだったけど」

ディーの声が返ってきた。

俺がこの場を立ち去らなかったもうひとつの理由がこれだった。こいつが先刻からずっと、息を殺して俺の様子を窺っていたのだ。

「それだけ俺が優秀な前衛ってこった」

「全くね」

生け垣を回り込み、ディーは俺の座るベンチに並んで腰を下ろした。

「幸せに思うわ。これであんたにもう少し分別があればね」

「そうかな」

俺はそらっとぼけた。マイノスとの話を盗み聞きしていたディーが何を言おうとしているのかは予想がつく。

「そうよ。独りで迷宮に入ったりとか、あたしがあんたならしないわ。勝ち目のない賭けもね」

「……」

「ねえ、本気なの」

身を乗り出し、ディーは俺の目を覗き込んだ。

「聞いてたんだろ」

俺は肯定した。

「何を考えてんのよ、あんたも、マイノスも！」

眉を寄せ、ディーは声を荒げた。「五賢者の話を全然聞いてなかったんじゃないの？」

「大破壊のことか」

「それ以外に何があるのよ！　もしあの断崖を攀れたとして――蜥蜴だって無理でしょうけどね――しかもあの妖獣がうようよいる迷宮を抜けて、運良くまだ無事だったガッシュたちと合流できたとしてもよ。助かりやしないのよ、誰も。大破壊が起きれば、どこにいたって死ぬわ。それが迷宮の中か外かの違いだけだってのに、それでもわざわざ連中を助けに行こうって言うの」

俺は無言だった。

ディーは続けた。「義理堅い善の連中だって、多分そんな奇特な真似はできないでしょうよ。まして悪のあんたが、何だってマイノスに従う気になるのよ？」

「……」
「普通なら、取る道はふたつよ。死ぬまでの短い間をせめて思うままに過ごすか——あんたの好きな酒を浴びるほど飲んだっていいし、気に入った相手と快楽に耽ったっていいわ——そうじゃなければ、できる限り遠くに逃げるかのどちらか。東の内陸部は地盤が古くて安定してるって話だし、もしかしたら大破壊から助かるかも知れないわ。でもね、だったら今すぐにこの都を出なきゃならない。スケイルに行ってる暇なんてないのよ」
最後は、子供に言い聞かせるような口調だった。
正論だった。
悪の戒律を持つ冒険者なら、まずそのどちらかを取るだろう。ディーとザザがそうしたって、俺が責める筋合いではない。
仲間の命を第一に考える善の連中にしろ、間もなく大破壊が訪れるとあっては救出になど向かわないだろう。マイノスが梯子山に行く最大の理由も、救出よりはむしろ妖獣への復讐の念にかられているからに他ならない。
そして俺は——。
「——なあ、ディー。お前の生き甲斐ってのは何だった」
「え……何よ急に」
戸惑った様子で、ディーが訊き返す。
「思うままに生きるなら、俺はやはりスケイルに行きてえ」
俺は言った。「酒もいいし、女だって嫌いじゃねえ。死んだ気になりゃ大破壊からも逃げられるかも知れねえ。だがな、賢者の話を聞いた時に思ったのはそんなことじゃなかった」
「——」
「戦いてえと、そう思った。それで決めたのさ。マイノスに頼まれたからじゃねえよ」
真意を確かめるように俺をしばらく見つめると、ディーは肩をすくめて大きなため息をついた。
「本気で言ってるところが始末に負えないわね。忍者ってみんなこうなのかしら」
「かもな」
そう言って、俺もディーも黙り込んだ。
奇妙な沈黙が流れた。
ディーはベンチに真っ直ぐ座り、俺に横顔を向けている。呆れているようだったが、怒っているようにも見える表情だ。
それがどうにも落ち着かず、俺はとっておきの冗談を披露した。
「もしガッシュやボルフォフに会えたら、連中は死ぬほど驚くだろうぜ。悪の俺が助けにきたんだからな。フレイは足の裏の毛でもむしって夢かどうか確かめるだろうよ」
「つまらない」
ぼそりと呟かれ、俺は黙った。結構面白いと思ったのだが。
ややあって、ディーはまた呟いた。
「あたしは、つき合わないからね」
「へっ？」
「スケイルになんか行かないって言ってるのよ」
眉を吊り上げて、ディーは俺を睨みつけた。「期待はしてなかったでしょうけどね。あたしはこれからおもしろ可笑しく過ごすつもりだもの。男どもをはべらせて、せいぜい楽しんでやるわ」
ディーは不機嫌そのものだった。しかし何を怒っているのか、俺にはさっぱり理解できない。
戦闘時の相手の心理状態なら手に取るように判るのだが、平時の女の心理となるとこれは全くの別物なのだ。
「大体ね、あたしは盗み聞きをしに来たんじゃないのよ。もうどうでもいいかも知れないけど、例のボルタックの客分が出かけたって知らせが来たの。グニルダ寺院跡を見物するとか言ってたそうよ」
「寺院の廃墟に？」
話の矛先が変わったのはありがたかったが、それ以上に俺はこの知らせに興味があった。
俺の命の恩人とも言うべきあの男が、今は廃墟でしかないグニルダ寺

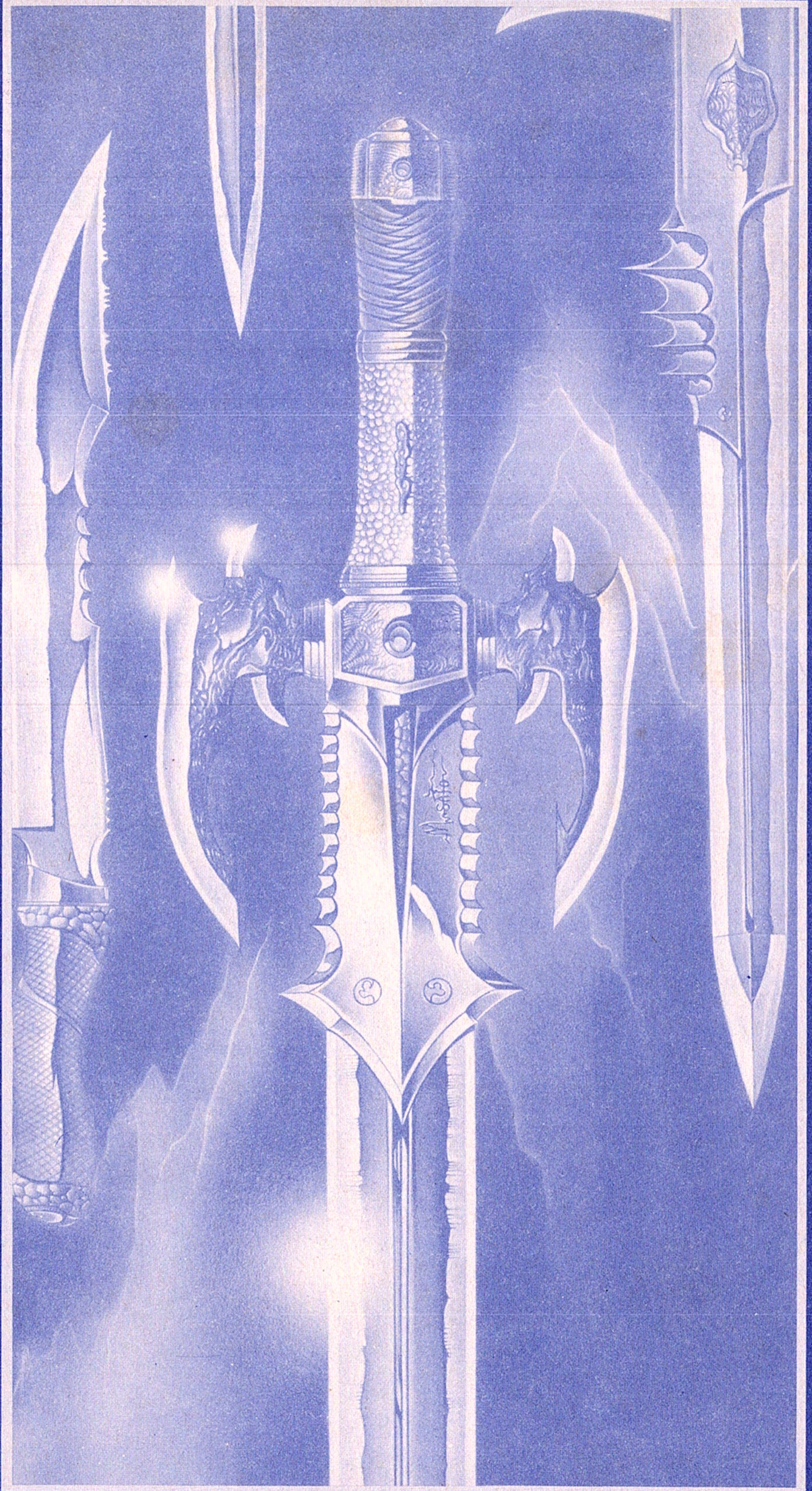

Masaki

院跡などに、一体何をしに向かったのか。
「熱心なグニルダの信徒なんじゃないの？　用件はそれだけ。確かに伝えたわよ、朴念仁」
言いながら、ディーはベンチから腰を上げた。「せいぜい夕べのお相手の娘を泣かさないようにね」
一瞬、俺は何のことか判らなかった。
「あんたの頬を引っ掻いた、ぞくっとくるほどいい女とやらよ」
「——ああ」
夢魔につけられた傷のことだった。ディーにはまだ夢魔の件は話していないため、生身の女だと誤解しているらしい。
「決着はつけねえとな」
「何の決着だか。じゃあね、あたし行くわ」
「いや、ちょっと待った」
立ち去ろうとするディーを、俺は立ち上がって呼び止めた。「寺院跡までつき合っちゃくれねえか。例の男の素性が知りてえんだが、あの奇妙な呪文と言い、俺の知識じゃ手に余る」
「あたしも？　まあ、いいけど」
考える素振りを見せたものの、ディーはすぐに承諾した。「その位はつき合ってあげてもね。それに、その男っていうのが凄い美男らしいのよ」
「へえ」
フードを被り、ベールまで垂らしていたため、俺は奴の顔を全く見ていない。美男と呼ぶからには、さほど歳は食っていないということか。
「だったら急ぎましょ。あんな場所にいつまでもいるとは思えないわ。瓦礫の山しかないんだから」
そう言って、ディーは先に立って王宮へと続く小径を戻り始めた。
俺も、後に続く。
夜のリルガミンにいつの間にか、霧が出始めていた。
王国の守護神グニルダを祀る大寺院の跡地は、リルガミン市の北端に位置している。
かつては精霊神グニルダの主神殿として多くの参拝者を集めたこの寺院も、異変初期の地震で倒壊して以来一年が経過した今では全くその面影を残していない。
グニルダの杖が安置され、都市全域を覆う魔法障壁が最も強力に働いていた筈の寺院の崩壊は、グニルダ神に対する人々の絶対的な信頼を揺るがすに足る出来事だった。
天変地異の対応に追われた賢者会議が再建計画を先送りにしていることもあったが、以前はあれだけ隆盛を誇った寺院の広い敷地に、片づける者もなく瓦礫の山が築かれている景観は見ていて気分の良いものではない。この都市に住む者の大半は人間族だが、総じて我が種族は信仰心が薄いと言われるのも頷ける有様だった。
「この霧は何よ。こんなランプの灯りなんて足下だって照らせやしないわ」
俺の横で、ディーが忌ま忌ましげに毒づいた。小石につまずく度に反射的に呟くため、もう何度も同じ台詞を繰り返している。
現在は訪れる者も稀なその廃墟に、俺とディーは足を踏み入れていた。
リルガミンには珍しい夜霧が、いつの間にか視界を覆い尽くしている。
ディーの言う通り、携行ランプの光など役に立たない濃密な霧だ。
石畳の広場には寺院の残骸が散らばり、そこかしこに折れた円柱や巨石が怪物じみたシルエットとなってぼんやりと浮かび上がっている。
だが、そこに俺たち以外の人影は見当たらなかった。
「ボルタックに戻ったんじゃない？　こう視界が利かないんじゃあ、危なっかしくて歩いてもいられないわよ」
また石を踏みつけて転びかけ、ディーは泣き言を言った。
霧が深く、敷地が広いとは言え、もとが限られた空間しかない城塞都市の中だ。あの男がこの寺院跡にいるのなら、もうとっくに出会ってもいい頃だった。
白く煙る廃墟に、俺たちの足音だけが静かに響いている。俺は全身の神経を聴力に集中させていたが、他には何の音も聴こえてこなかった。
だが、俺は確信していた。
毛先ほどの気配も感じられない。が、霧のカーテンの向こうから、確

かに誰かが俺たちを見つめている。
それがあの男であることに、疑う余地はなかった。
「帰りましょうよ、ねえ……」
「しっ」
俺は人差し指を唇に当てた。「いるぜ。賭けたっていい」
「どこに？」
ディーは周囲を見回した。
「判らねえ。だがよ、気配はねえってのに見られてる感じがする。こいつはただ者じゃねえぞ」
俺は用心深く囁いた。マスターレベルに達した忍者に隠身してのけるとなると、これは並大抵の実力ではない。隠れんぼの天才か、さもなければ相当の修羅場をくぐってきた奴だ。
その時、空気が流れ始めた。
湿った微風が、ゆっくりと俺たちの周りの霧を押し流していく。
その霧の漂う先に、巨大な影が見えた。その影に当たり、霧はふたつに分かれて後方へと流れている。
俺は目を凝らした。
それは、傾き折れながらもまだ大地に突き立っている円柱だった。
だが、俺はそれを見ていたのではない。
「探している相手は、見つかったかな」
頭上から、炎上する冒険者の宿で聴いた、あの声が響いた。
「ああ、たった今な」
俺は応えた。
円柱の上に、影がわだかまっていた。
「円柱に——」
びょう、と風が吹き抜け、言いかけたディーの髪を流した。
円柱の周囲の霧が吹き払われ、冴えた月光が降り注ぐ。
長身の男が、そこに立っていた。
ベールを取り払い、フードも被ってはいなかったが、間違いなくあの男だ。
信じ難いほどに美しい男だった。長い金色の髪は月の光に照り輝き、白く浮かび上がる肌は磨き抜いた宝玉を思い起こさせる。
マイノスも優男だが、あいつは人間としての美男だ。だが、こっちは非人間的なまでに完璧な美貌だった。
ダークブラウンの瞳が、俺たちを見下ろしていた。
「私のことを、嗅ぎ回っているようだな」
「礼が言いたくてね。悪く思わねえでくれ」
俺は頭を掻いた。「それによ、訊きてえことも幾つかあってな」
ふっと、男が微笑んだ。
「まずは名乗れ。名は人を表す」
「ああ」
応えながら、俺は考えていた。名を尋ねるってことは、俺を知っている訳じゃないのか？
「ジヴラシアだ。こっちは——」
「ディーよ」
男を見つめながら、ディーは短く答えた。
「ふむ。ならば名乗ろう」
不安定な円柱上で微動だにせず、良く通る声で男は言った。「我が名はアドリアン。ファールヴァルト公国より、長き旅の果てにこの地に辿り着いた」
「ファールヴァルトですって！」
ディーが叫んだ。「まさか。だってそれは古代に滅亡した〝森の彼方の国〟の名よ」
「ほう、博識な女だな」
アドリアンと名乗る男は言った。「だが事実だ。そして私はその秘術を伝えし者」
次の瞬間、俺たちは息を呑んだ。
アドリアンの躰が、ふわりと宙に浮かび上がっていた。
（次号につづく）

特報!!
小説ウィザードリィ・シナリオ4「ワードナの逆襲」 手塚一郎・著
7月4日発売決定!! お早めにどうぞ!!

●本誌Vol.2号で別冊ふろくとして登場した同小説に大幅な加筆!新たなウィズ世界に御期待ください!



▶ファンタジーランドは
(P104)からお読み下さい。